

児童相互のつながりを大切にした学級集団づくり (2年次)

—「学級わくわく大作戦」を通して—

中澤 慶子（京都市総合教育センター研究課 研究員）

社会構造や雇用環境が大きくまた急速に変化している予測困難な時代になってきている中で、平成30年度京都市学校教育の重点において「子どもが未来を創り上げていくために必要な資質」として「主体性」や「社会性」が挙げられている。これらの資質・能力を育み、児童が力強く生きていく基盤をつくる場として、児童にとって身近な学級集団が重要であると考え、本研究では、児童が相互につながり合う学級集団づくりの過程で、このような資質・能力を育んでいくことを目指し、実践を行った。

学級集団づくりの中心として取り組んだのは、児童がわくわくしながら取り組むことができる学級活動である。学級活動がより楽しく、充実したものになるよう児童が話し合い、話し合ったことを実現していく中で、このような資質・能力を育んでいくことができるという仮説を立てた。

このような学級活動を中心とした学級集団づくりを「学級わくわく大作戦」と名付け実践した結果、児童同士のつながりが強くなり学級集団としての高まりが見られ、その有用性が検証された。

目 次

はじめに	1		
第1章 児童相互のつながりを大切に 学級集団づくりを目指して		第3章 実践について	
第1節 1年次の研究の成果と課題	1	第1節 児童の活動前	
第2節 学級目標や学級活動に関する調査から		(1) A校について	10
(1) 学級目標や学級活動に関する調査と 分析	2	(2) B校について	11
(2) 学級目標の意義と設定の在り方	3	第2節 児童の活動中	
(3) 学級活動の目標と内容	4	(1) 問題の発見・確認	12
第3節 2年次の研究に向けて		(2) 話合い活動	14
(1) 本研究で目指す資質・能力	5	(3) 準備	15
(2) 学級活動を軸とした学級経営	5	(4) 集会活動	16
(3) 2年次の研究	6	(5) 振り返り	17
第2章 「学級わくわく大作戦」の取組		(6) わくわく睡眠大作戦	18
第1節 児童のやる気を維持し高めるために		第3節 児童の活動後	
(1) 学級活動とその他の教科等との 関連付け	6	(1) A校について	19
(2) 児童のやる気を維持し高める 3つの視点	7	(2) B校について	20
第2節 「学級わくわく大作戦」の指導の流れ		第4章 研究の成果と課題	
(1) 児童の活動前	8	第1節 学級目標実現に向けて	
(2) 児童の活動中	9	(1) A校について	21
(3) 児童の活動後	10	(2) B校について	22
		第2節 「学級わくわく大作戦」を通して	
		(1) 学級活動を中心とした学級集団づくり	23
		(2) 3つの視点を取り入れることを通して	24
		おわりに	24

< 研究担当 > 中澤 慶子 (京都市総合教育センター研究課研究員)
 < 研究協力校 > 京都市立仁和小学校
 京都市立勸修小学校
 < 研究協力員 > 矢野 誠 (京都市立勸修小学校教諭)
 石田 由希子 (京都市立仁和小学校教諭)

はじめに

「わくわく」この気持ちは、子どもにとっても大人にとってもプラスの影響を及ぼす。新しいことにチャレンジする気持ちが湧いてきたり、やる気が出て仕事や学習に対する集中力が増したりする。また、他の人にやさしく接することができたり、全身から力が湧いてきて、よい健康状態を保ったりすることにもつながるだろう。これらは、何か楽しみなことがあって、その期待感で、思考がプラスになった結果起きたことだろう。宿泊行事前、遠足前の児童の様子は、まさにこの「わくわく」感からくるものだろう。学級の雰囲気が明るくなり、児童がみんな生き生きしているのを感じることはないだろうか。

2年次では、このような「わくわく感」を学級で共有することで、児童同士のつながりを強くしたり、学級全体をやる気に満ちた集団にしたりして、より一層子どもの主体性や社会性を育みたいと考える。

第1章 児童相互のつながりを大切にしたい学級集団づくりを目指して

第1節 1年次の研究の成果と課題

1年次の研究では、学級目標を達成させるという課題解決に児童が取り組む過程で、「主体性」や「社会性」が育まれていくと考え、実践を行った。図1-1は、1年次の主な取組を表したものである。

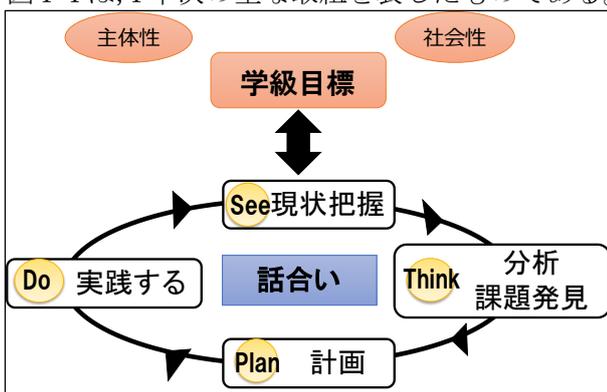


図1-1 1年次の取組

図1-1のように、学級目標達成をめざし、児童自身が現状を見つめ(S)、課題を発見し(T)、解決に向けて計画し(P)、実践する(D)という児童による話し合いを中心としたSTPDサイクルを活用した一連の活動を行った。具体的には、学級目標を達成させるために、何が課題で、解決のために何を

していけばよいのかについての話し合い活動を行い、話し合ったことを「集会活動」や「係活動」で実践するという学級活動(1)の学習過程を利用し、実践していった。そして、それらの活動を児童の自治的なものにしていくことで、児童が相互につながり合う学級へと高まり、その過程で主体性や社会性が育まれていくと仮説を立て、実践検証を行った。

活動の最初は、主体的に参加する児童とそうでない児童に分かれた。しかし、児童同士の話し合いを通して課題を見つけることができるようになると、話し合いが深まり、決まったことを主体的に実践する姿が見られた。また、一連の活動の中で、児童がそれぞれの思いを伝え合い、納得のいくまで話し合う経験をする中で、相互理解が深まり、相手の気持ちを考えて行動する姿が見られるようになった。このような変化の要因として、2つあげられると考える。1つ目は、話し合い活動における教員の関わりの変化である。2つ目は、取り組んだ課題が児童にとって取り組みたいという意欲のわくものになったということである。前者は、話し合い活動中における教員の助言の回数の変化である。児童が活動に慣れてきて、徐々に児童による進行が可能になってきたこともあるが、意図的に助言を減らしたことで、自分たちの力でやり遂げたいという児童の意欲を掻き立てたと考えられる。後者は、前者の延長上にあるものだが、児童自身で課題を見つけることができた結果、それが共有され、協力して課題を克服していきたいものになったということである。

その他の取組の成果としては、話し合い活動等を進行する計画委員や係活動のリーダーを輪番制で行う取組中での児童の変容が挙げられる。これは、リーダーとそうでない立場の両方の立場を経験することで、お互いの思いを理解することができると考え行った取組である。実践を行うと、リーダーとして、話し合いを進めていく大変さに気づき、リーダーではない立場になった際に、協力してこうとする姿が見られるようになった。しかし、それ以上にリーダー経験が多数ある児童と経験の少ない児童が、いつもとは違う立場を経験することで、それぞれの新たな一面を発見することができたり、個々の活躍の場が広がったりした。それにより、「自分は役に立っている」や「自分にもできる」といった感情が湧いてきて、自尊感情の高まりにつながったと考えられる。それが児童の意欲につながり、主体的に取り組む要因となったの

ではないかと考えた。

実践を行う中で、いくつか課題も見られた。活動の中で達成を目指した学級目標が、児童にとって目指していきたいと感じるものになっていたかということである。学級目標実現を目指していくことは、学級経営上必要なことであると考えられるが、その意義を考えた上でもう少しアプローチの仕方を変えていながら、児童が進んで実現を目指していけるようにする必要がある。また、学級の目標達成に向けての自分の目標をそれぞれが考えていく必要があったと考える。そうすることで、個々が目標を目指してがんばることが、学級の目標達成につながるという意識を持つことになったであろう。1年次の課題を踏まえ、学級目標へのアプローチの仕方、個人目標の設定等、学級目標の在り方についてまとめていく必要があると考えた。

次に、時間の使い方についてである。実践の中では、話し合い活動の進め方などを理解するまでに、多くの時間が必要となった。しかし実際は、年間35時間(第1学年34時間)の学級活動のうち、これらの活動にあてることのできる時間は限られている。そこで、学級活動と他教科等に関連付け、限られた時間をより効率的かつ効果的に使うことができるよう見通しを持って計画していくことが必要だと考えた。2年次は1年次の実践を生かし、課題を改善していく。

第2節 学級目標や学級活動に関する調査から

(1) 学級目標や学級活動に関する調査と分析

1年次の研究より、どのように学級目標を設定すれば児童が主体的に達成を目指していけるのか、また設定した学級目標が形骸化しないようにするにはどうすればよいのかを調査し、方法を整理する必要性を感じた。さらに、児童の話し合い活動の時間は、きちんと確保されているのか調査を行う必要性も感じた。

そこで、本市採用5年目研修会に参加した教員を対象とした調査を行い、93名から回答を得た。調査では、1年間を通じた実践についての調査であったため、設問のすべてが前年度の実践についての回答を求めるものとした。

まずは、学級目標の調査についてまとめていく。右の図1-2は、「学級目標を設定した際に、学校教育目標や学年目標を意識して設定しましたか」という設問に対し得られた回答である。

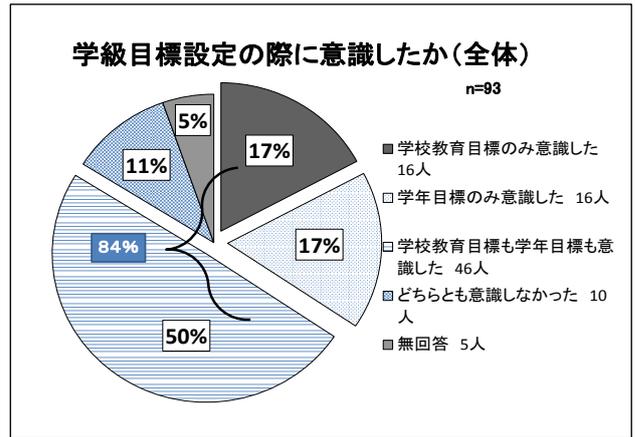


図1-2 学級目標設定の際に意識したか

図1-2のように、「学校教育目標も学年目標も意識した」と答えた割合が50%だった。両方ないしどちらかを「意識した」との回答は、全体の84%を占める。この結果より、学校教育目標や学年目標を意識して学級目標を設定していくべきであると考えられる教員が8割以上いるということが読み取れる。

図1-3は、「昨年度、学級目標をどのように設定しましたか」という設問に対し得た回答である。

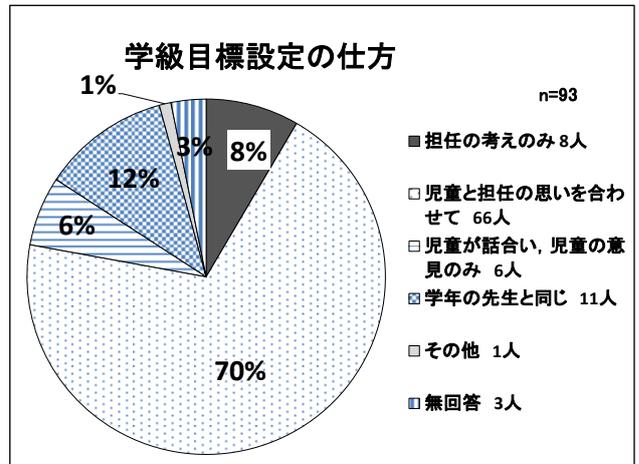


図1-3 学級目標設定の仕方

図1-3のように、70%が「児童と担任の思いを合わせて」設定したと答えていた。低・中・高学年別に分析すると、低学年では「学年の先生と同じ目標を設定した」38%や「担任の考えのみで設定した」19%というように、教員が設定する割合が57%と多かった。それに対し、高学年では、前者が5%、後者が2%の合計7%と教員のみで設定する割合が低かった。低学年では、児童の発達段階を考慮し、教員が設定する割合が多いと考えられる。また逆に、高学年では学級目標に児童の思いを汲み入れることが多いと読み取れる。

次に、設定した学級目標が形骸化していないか、

またしないようにどのような取組をしているのか調査を行った。まずは、「児童が学級目標を意識して活動に取り組むことができるように働きかけを行いましたか」という設問を行った。全体の90%にあたる84名が「働きかけを行った」と答えた。

では、具体的にどのような働きかけを行っているのだろうか。図1-4は「働きかけを行った」と答えた84名を対象に、複数回答で「どのような働きかけを行ったか」を尋ねた結果である。

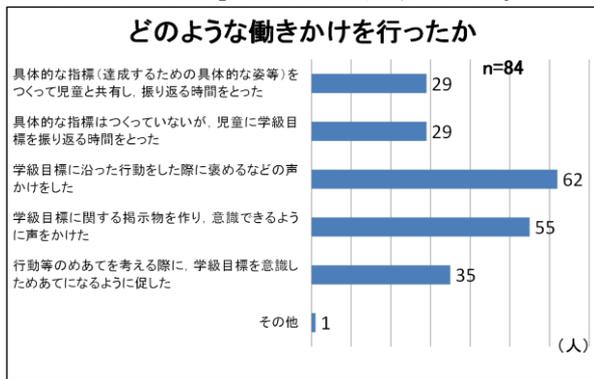


図1-4 どのような働きかけを行ったか

図1-4のように「学級目標に沿った行動をした際に褒めるなどの声かけをした」「学級目標に関する掲示物を作り、意識できるように声をかけた」の項目が半数を上回った。「学級目標の具体的な指標(達成するための具体的な姿等)を作って児童と共有し、振り返る時間をとった」と答えた教員は、全体の35%の29人に留まった。しかし、どれだけ学級目標に到達できているのか振り返る時間を設定しなければ形骸化してしまうのではないだろうか。

次に、学級活動についての調査である。図1-5は、『学級や学校での生活をよりよくするための課題』を解決する話し合い活動(学級会)の時間をとりましたか」という設問に対する5年目教員の回答である。

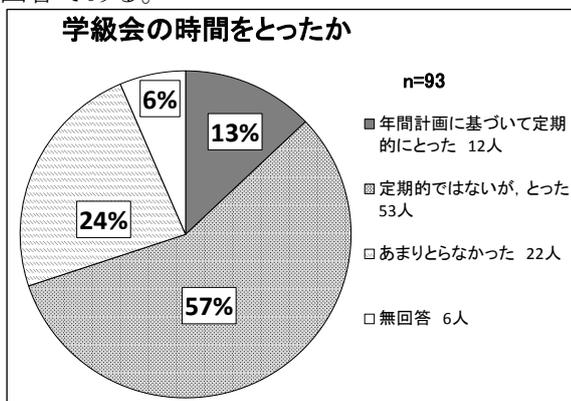


図1-5 学級会の時間をとったか
「年間計画に基づいて定期的にとった」と回答

した教員は、12人と全体の13%に留まった。「定期的ではないがとった」という教員が一番多く全体の57%になった。

図1-6は、学級会の時間を「あまりとらなかった」と回答した22人に、複数回答でその理由を尋ねた結果である。

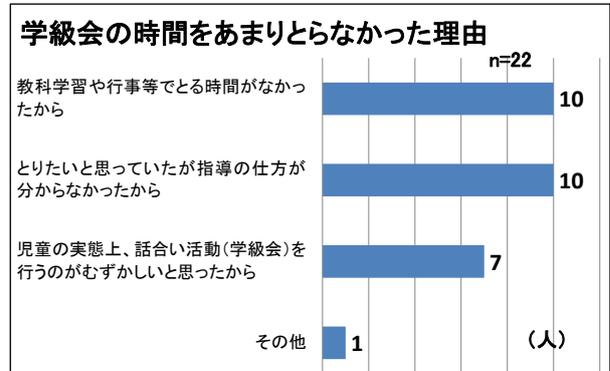


図1-6 学級会の時間をあまりとらなかった理由

これらの要因は、経験の少ない採用5年目教員ゆえであったのかもしれないが、指導の仕方を学んでいくことで改善されていくのではないだろうか。さらに、この結果を低・中・高学年に分けて分析すると、低学年では「児童の実態上」が一番多く、「あまりとらなかった」と回答した低学年の教員8人のうち5人だった。そして高学年では、「時間のなさ」や「指導の仕方の分からなさ」と回答した教員が9人のうち5人だった。

(2) 学級目標の意義と設定の在り方

調査より、学級目標の設定の在り方を整理し、形骸化しないような取組について考えていく必要性を感じた。そこで、改めて学級目標の意義や設定の在り方について考えてみることにした。

赤坂は、学級目標の意義について、目標と目的の違いから以下のように述べている。

目的は、最終的に目指すべきゴールです。目標は、それを達成するための道標です。つまり、学級目標とは、子どもにとっては目的的な役割をもちますが、教師にとってはあくまでも目標なのです。(中略) 学級目標を達成することが学級づくりのゴールではないのです。学級目標は、教師の学級を育てる戦略の中にしたたかに位置づけられるものです。(1)

「教師の学級を育てる戦略」とは、学級経営のことであると捉えられる。白松は学級経営について「学級経営は、学校の教育目標を達成するために行う学級での様々な指導や教育活動の条件整備

の総体」②と述べている。これらから考えて、教員にとって、学級目標は、学校教育目標を実現させるという目的のための道標であると言えるだろう。つまり、児童に学級目標を目指させることを通して、学年目標や学校教育目標の実現に向かうということである。また、学級みんなで同じゴールを目指し切磋琢磨することは学級集団づくりにおいて大切であり、ゴールにあたるのが学級目標だろう。

では、どのように学級目標を設定すればよいのだろうか。学級目標設定の在り方やそれを形骸化させないようにするための工夫について整理していく。

学級開きの前に、学校教育目標実現の内容を理解し、実現に向けて学年として、学級として、どのような目標が必要かを事前に学年担当で共通理解しておく。それらから考えたことを基に、学級担任として学級の目指すべき方向を児童に示した上で、児童と共に学級目標を設定することが大切であろう。これが、実現に向かう動機付けとなると考える。学年の発達段階のよっては、教員の示したものがそのまま目標になることもあるだろうが、その際も、児童が目指したいと思うことができる学級目標になるよう工夫する必要があると考える。

また、学級目標が、振り返り可能な具体的な内容になっていることも必要だと考える。抽象的なものになっていると、児童によって達成できたかどうかの基準が曖昧になり、児童自身に達成を実感させていくのは難しい。学級目標を具体化するために、下位目標で表現する工夫が必要である。例えば、「元気いっぱい」という目標は、「休み時間1度は外で遊ぶ」や「授業中全員に聞こえる声で発表する」などの下位目標で具体化する。その下位目標の達成を積み重ねていくことで、抽象的な上位目標（学級目標）の達成を実感させていくというものである。また、この下位目標は年に何度か振り返りながらその時の児童に必要なものに変えていくことが有効である。

右頁、図1-7は学級目標達成に向けた1年間の流れの例である。

図1-7のように、年に何度か振り返る機会を設定し、その時の学級の実態に応じた具体的な下位目標を設定することが有効だと考える。学級の実態を見取る際、学級や生活に関する児童アンケートなどの客観的な資料を用い、学級全体としてだけでなく、一人一人の実態を把握し、目標を修正

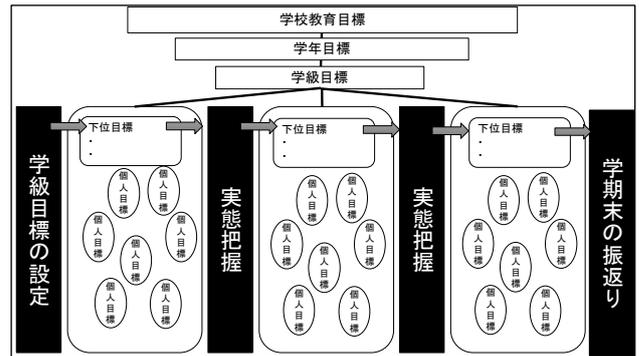


図1-7 学級目標達成に向けた1年間の流れの例

改善していくことでより実現に近づくことができるだろう。そして、年間を通いっ振り返りを行っていくのかを年度当初にある程度考えておくと、計画的な学級集団づくりが可能となるであろう。

さらに、学級目標達成に向けて具体的に自分はどうなことをしていくのか個人の目標を自分で決めることが必要だと考える。そして、個々の目標を達成させていくことが学級目標達成につながるということを児童が実感できるような工夫をすることが大切である。具体的な内容については、第3章で述べる。そうすることにより、自分は学級の一員であり、一人一人のがんばりが学級をよりよくするという意識につながる。

(3) 学級活動の目標と内容

新学習指導要領特別活動編では、学級活動の目標を次のように示している。

学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

(下線は筆者による) (3)

学級活動は、三つの内容に分かれていて、下線部は学級活動(1)の「学級や学校における生活づくりへの参画」を示している。また、二重下線部は、学級活動(2)の「日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」と学級活動(3)の「一人一人のキャリア形成と自己実現」を示している。

新学習指導要領解説特別活動編では、学級活動(1)について「主として自発的、自治的な集団活動の計画や運営に関わるものであり、教師の適切な

指導の下での、学級としての議題選定や話し合い、合意形成とそれに基づく実践を重視する」(4)と述べている。また、これらの内容は「日々の学級経営の充実と深くかかわる活動である」(5)とも述べている。調査では、学級会の時間をあまり計画的にはとれていなかったと答えた教員が多数いて課題であったが、やはり計画的に時間を確保していくことが必須だろう。

対して、学級活動(2)や(3)は、話し合いの題材が教員の設定によるものであることや解決方法を集団で話し合った後、それを基に個人目標を意思決定するというところである。

学級集団づくりにおける学級活動(1)の重要性については後述するが、学級活動(2)(3)についても計画的に活動を行うことは、学級経営において重要であると考えるので、これらの学習も取り入れながら学級集団づくりを行う。

第3節 2年次の研究に向けて

(1) 本研究で目指す資質・能力

平成30年度京都市学校教育の重点において「子どもが未来を創り上げていくため必要な資質・能力」として、「自分の目標を自分で見だし、物事に進んで取り組み、達成しようとする『主体性』と「より良い人間関係を形成し、他者との協調や配慮、集団に対する責任を自覚し態度化する『社会性』」(6)という2つの視点が挙げられている。

また、生徒指導提要では、生徒指導が目指すものは「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めること」(7)であると述べている。前半部の「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長」を図ることは、他者との違いを認め、自分らしさを大切に「自分は自分である」という意識を育むということである。また、後半部の「社会的資質や行動力を高めること」は、「自分は自分たちである」という意識を育むことである。社会を生き抜くためには、自分は様々な集団の中の一員であり、自分らしさを大切にしながら、相手も大切にするという意識を持つことである。前者が「主体性」後者が「社会性」と捉えられる。本研究ではこれらの資質・能力を「児童相互のつながりを大切に学級集団づくり」の過程で育成を目指していく。昨年度の課題を生かし、学級目標へのアプローチの仕方を変えていくが、それについては後述する。

(2) 学級活動を軸とした学級経営

新学習指導要領総則では、「学習や生活の基盤として、教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日ごろから学級経営の充実を図ること」(8)の重要性が述べられている。新学習指導要領解説特別活動編では、学級経営の内容について具体的に以下のように述べられている。

学級経営の内容は多岐にわたるが、学級集団としての質の高まりを目指したり、教師と児童、児童相互のよりよい人間関係を形成しようとするたりすることは、その中心的な内容である。(9)
(下線は筆者による)

学級経営の中心は、学級集団づくりや、よりよい人間関係の形成であると言えることが分かる。

学級経営は、教育活動全てで行うものがあるが、様々な集団活動に自主的・実践的に取り組む特別活動はその核となると考える。また、学級経営を充実させるための方法については、以下のように述べられている。

学級活動における児童の自発的・自治的な活動を中心として、各活動と学校行事を相互に関連付けながら、個々の児童についての理解を深め、教師と児童、児童相互の信頼関係を育み、学級経営の充実を図ること。(10)
(下線は筆者による)

学級経営を充実させるためには、学級活動における児童の自発的・自治的な活動が重要な役割を占めることが述べている。脇田は、自発的・自治的な活動が学級経営の充実結びつく理由を以下のように述べている。

自発的、自治的な活動が学級経営の充実結びつくのは、活動を通して児童相互の心的な結びつきが強くなってからである。子供たちは、話し合いで決まったことを実践し、実践したことを振り返る活動を通して友達との「関わり」を深め、どの子も生かされる支持的な風土の学級が形成されていくのである。(11)

つまり、児童による話し合いで決まったことを実践し、振り返る活動を通して、児童が関わり合い、それが相互理解につながり、それぞれのよさを生かしあう学級集団へと成長していくということである。また、児童にとって自由に決める範囲が広い学級活動は、活動意欲の湧きやすいものである。

このようなことから、学級集団づくりにおいて、学級活動は重要な役割を果たすと考える。

(3) 2年次の研究

「はじめに」で「わくわく」感が生活にプラスの影響を及ぼすと述べた。何かわくわくするようなことがあると、自然と表情が柔らかくなり人に優しくなったり、学習や運動へのやる気が出てきて、進んで取り組むことができるようになったりすることがある。もし、「わくわく」感を学級で共有できれば、児童同士のつながりが強くなり、さらには学級全体がやる気に満ちた集団になると考え、本研究の学級集団づくりに活用していくこととした。このように児童の「わくわく」感を活用した学級集団づくりを「学級わくわく大作戦」と命名する。図1-8は、本研究の構想図である。

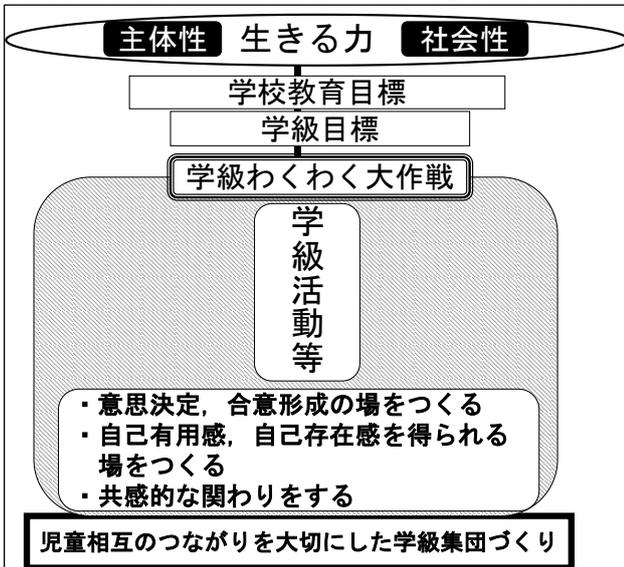


図1-8 研究構想図

児童が「わくわく」感を共有するものとして、学級活動(1)の集会活動を取り入れていく。集会活動がより楽しく充実したものになるよう、児童同士が話し合い、実践していく過程で学級集団として高まる。そして、それが学級目標や学年目標、さらには学校教育目標の実現、「主体性」や「社会性」といった児童が未来を強く生き抜くための資質・能力の育成につながると考える。しかし、活動の始めはわくわくし、やる気をもって取り組むが、徐々にそれが薄れてしまうといったことはよくあることである。そこで、児童のやる気を維持し高める工夫が必要だと考え、2つの工夫を取り入れていくこととした。1つは、学級活動とその他の教科等と関連付けて「学級わくわく大作戦」の計画を立てていくことである。もう1つは、次

に挙げる児童のやる気を育む3つの視点を活動の中に取り入れることである。視点の1つ目は、意思決定や合意形成の場をつくる、2つ目は自己存在感や自己有用感を得られる場をつくる、3つ目は、共感的な関わりするである。詳しくは第2章で述べていく。

- (1) 赤坂真二「学級を最高のチームにする極意」明治図書 2013.2 p.25
- (2) 白松賢「子供の生活や学習の基盤をつくる学級経営の充実」『初等教育資料平成30年5月号』東洋館出版社 2018.5 p.8
- (3) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編」東洋館出版社 2018.2.28 p.43
- (4) 前掲(3)pp.46~47
- (5) 前掲(3)p.48
- (6) 京都市教育委員会「平成30年度 学校教育の重点」京都市教育委員会 指導部 学校指導課 2018 p.3
- (7) 文部科学省「生徒指導提要」教育図書 2010.11 p.1
- (8) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編」東洋館出版社 2018.2 p.99
- (9) 前掲(3)p.31
- (10) 前掲(3)p.31
- (11) 脇田哲郎「自発的、自立的な活動を中心とした学級経営の充実」『平成29年版 小学校新学習指導要領ポイント総整理』東洋館出版社 2017.12 p.113

第2章「学級わくわく大作戦」の取組

第1節 児童のやる気を維持し高めるために

第1章で、「わくわく」感を維持し高めるための2つの工夫について述べた。第1節では、なぜそれらが必要なのか、またそれらを取り入れてどのようにして「わくわく」感を維持し高めていくのかについて述べていく。

(1) 学級活動とその他の教科等との関連付け

学級活動とその他の教科等と関連付けて「学級わくわく大作戦」の計画を立てていくことは、新学習指導要領総則の「カリキュラム・マネジメント」の重要な側面の1つである「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと」(12)にあたる。また、新学習指導要領解説特別活動編では、特別活動について「各教科等で育成した資質・能力について、実践的な活動を通して、社会生活に生きて働く汎

用的な力として育成する教育活動でもある」(13)と述べている。つまり、各教科で身に付けた資質・能力を特別活動での実践を通し、生活や社会をよりよくするための汎用的な力へとつながるようにするということである。

「学級わくわく大作戦」においては、学級活動に向かう児童のやる気を維持し高めたりする視点で学級活動とその他の教科等と関連付けた計画を行っていく。例えば、音楽の学習で合奏した曲を集会活動の最後にみんなで演奏したり、運動会で踊った民謡をみんなでもう一度踊ったりすると、学級活動以外の時間も「学級わくわく大作戦」として繋がっていると感じ、それが児童のやる気を高めることにつながると考える。また、図画工作でつくったカードを、集会活動に招待するための招待状としたり、国語で秋のよさを表した詩を集会活動の際に掲示したりするなど考えられる。さらには、そこで他の教員や保護者などを招いて披露したりするとますますやる気が高まるだろう。また、他教科での学びにも目的意識や相手意識が加わると考える。つまり、音楽で合奏したものを人に聞いてもらうという目的ができたり、図画工作のカードも人に喜んでもらえるような工夫が足されたりするだろう。

また、児童の心身が健康な状態でなければ「わくわく」感を醸成するのは困難だろう。寝不足でイライラした状態からいきなり「わくわく」した状態にするのは難しいと言える。心身の健康のためには、自分自身で生活習慣を見直していく必要があることに児童が気付くことが必要である。これらは、学級活動(2)(3)の学びや体育科保健領域の学習が関連しており、これらの学びが児童の「わくわく」感の醸成を支えていくものとなると考える。また、道徳科の学びも児童の「わくわく」感の醸成を支えるものとなるだろう。相手を思いやることの大切さや、やると決めたことを最後までやり抜くことの大切さなどの道徳科での学びを学級活動で生かすことで、気持ちよく活動に取り組みめたり、友達とのトラブルを回避できたりし、「わくわく」感を支えることにつながると考えるためである。反対に、道徳科で学んだことと、学級活動での経験とをつなげることで、教材がぐっと自分に近づき、より効果的な学習が展開できると考えられる。

(2) 児童のやる気を維持し高める3つの視点

坂本(14)は、「やる気は『出させる』のではなく、

『育てる』のである。子ども自身からやる気が出るように条件をととのえる」ものであると述べ、やる気を育てるためには、①子ども一人ひとりが自尊感情が持てるようにすること②子どもが自分で決めて実行し、責任を果たすことのできるよう自主性を尊重すること③教師や親と子どもとの間に温かい人間的ふれあいがあることを挙げている。本研究では、それを3つの視点に整理し、活動の中に取り入れていくこととした。

〈視点1「意思決定や合意形成の場をつくる」〉

児童が自分で決める意思決定の場や、学級みんなで話し合っただけで決める合意形成の場を意図的に活動に取り入れていくことである。自分でもしくは自分たちで決める自由があるということは、3つの視点の中でも最も児童のやる気に直結すると考えるので重視していきたい視点である。しかしながら、教員は常に児童の様子を予測して計画し指導していくことがより重要であることは言うまでもないことである。そこで、児童の実態を把握し、どのような場面で児童の決定に委ねていくことが有効かをあらかじめ計画しておくことが必要だと考える。

〈視点2「自己存在感や自己有用感を得られる場をつくる」〉

学級で自分が必要とされ、存在価値があると感じることが児童のやる気の向上につながり、そのような場を意図的に設定することが自己存在感や自己有用感の高まりにもつながると考える。「がんばったことみつけ」などを活動の中に入れていくことや、集会活動の内容自体にそれぞれの個性を生かすことができる工夫等を取り入れていくなどである。

〈視点3「共感的な関わりをする」〉

自分のがんばりを教員に認めてもらうということは児童のやる気につながる。そのため、教員が児童の活動に対し自分事のように喜ぶ姿を見せたり、児童と一緒に心から活動を楽しむ姿を見せたりするなど工夫し、意識的に共感的な関わりをしていくことで効果が上がると考える。

第2節 「学級わくわく大作戦」の指導の流れ

「学級わくわく大作戦」は以下のような指導の流れで実践していく。

- | |
|---|
| <p>①児童の活動前</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態把握 ・目標設定と計画 |
|---|

- ②児童の活動中
 - ・3つの視点を意識した関わり
- ③児童の活動後
 - ・活動全体の振り返り

(1) 児童の活動前

①児童の実態把握

「学級わくわく大作戦」の目標設定や計画を行う前に、まずは学級や児童の実態をつかむことが必要である。普段の生活の中での学級や児童の観察だけではなく、児童アンケート等を活用しその変化を見取ると、学級全体や個々の児童のことを客観視できる。本研究では、児童に学級に関するアンケートを行い、実態を見取っていく。表 2-1 は、その際に用いたアンケート項目である。

表 2-1 学級に関するアンケート

アンケート内容	あてはまる	あてはまる どころかという と	あてはまらない どころかという と	あてはまらない
わたしは、クラスの人の役に立っていると思う				
わたしは、クラスの人ととき相手の気持ちを考えて行動していると思う				
わたしは、学校に来るのが楽しいと思う				
わたしは、クラスの人といつも仲よくしていると思う				
わたしは、このクラスになってよかったと思う				

「あてはまらない」を 1, 「あてはまる」4 として集計してグラフに表し、学級と個人の見取りを行う。これを年に何度か行うことで、その変容を見取ることができる。これらの結果とあわせて、児童の学習や行事等での様子などからも把握することが必要である。児童の実態や変化を把握しやすいようにするために、児童に関する情報や普段の生活の中での様子をすぐ書き足していけるような表などを用い書きためていくとよいだろう。

表 2-2 は児童の情報を書き足していけるようなメモの例である。

表 2-2 児童活躍メモ

名前	児童について	学期	児童の活躍			
			授業中(行事を除く)	授業以外(行事を含む)		
A児	12/3生まれ (得意) 計算・短距離 離ピアノ (苦手) 跳び箱・ ピーマン	1学期	5/7 国語	初めて自分から発言	5/18	1年生がけがをしたら優しく声をかけ保健室につれていく
			6/2 算数	図を書いてみんなに説明する		
		2学期	9/13算数	100マス計算で学級最高記録をだす	9/2	応援団に立候補し進んで練習に参加する
	11/3国語		討論会では、自分の立場を明らかにして説得力のある意見を言っていた	10/5	代表委員に立候補するなど積極的な姿が見られるようになる	
	3学期		1/15音楽	合唱では、高音パートの手本となった	2/7	あいさつ運動では朝早くから大きな声であいさつを行っていた
		2/3学活	話し合い活動の司会になり、うまくまとめた			
B児	1/7生まれ (得意) 水泳	1学期	4/24音楽	リコーダーが得意で、みんなの手本となる	4/23	一人で教室にいる友達に声をかけて一緒に遊ぶ

気が付いた時にすぐ書き足していきただけでは

なく、放課後など時間を決めて書くなど工夫しておくこと、児童のちょっとした変化にも気付くようになり、褒める機会も増えるだろう。また、児童による偏りにも気付き、一人一人の児童理解を大切にすることにつながるだろう。これらのメモは、学級わくわく大作戦の際の児童の見取りに使うことができるだけでなく、通知表作成の際の所見や個人懇談などいろいろな機会に活用することができると思う。

②目標設定と計画

学級や児童の実態を把握したら、次に学級としてどのような集団にしていくことが必要なのか、児童にどのような力を付けていくことが必要なのかを考え「学級わくわく大作戦」の計画を行う。そこで指針となるのが年度当初に設定した学級目標である。学級目標は、年間を通じ目指すものであるが、それを達成するための短期的な目標(学級目標の下位目標, 図 1-7 p.4 参照)を立てて目指していくのが「学級わくわく大作戦」である。

図 2-1 は、「学級わくわく大作戦」に向けた目標設定シートである。

学級わくわく大作戦

月 日 ~ 月 日

目標

【児童の実態】

【主な活動内容】

【活動のポイント】

図 2-1 目標設定シート

学級や児童の実態を把握し、課題を見つける。それらから目標を設定するが、それは学級目標よりもさらに具体的なものになるようにする。その後、それを実現するためにはどのような集会活動にすれば有意義となるか考えていく。集会活動の内容に関しては、児童の実態やねらいに応じてある程度枠組みを決めておく方がよいのか、活動の目的を伝えて内容は児童が話し合っ決めていくのか変えていくとよい。

目標や集会活動の内容をある程度決定すれば、「学級わくわく大作戦」の計画を立てる。表 2-3 は、全体計画を立てるための計画シートである。

表 2-3 計画シート

児童の活動	関連付けが可能な 教科・領域	教員の関わり方の3つの視点		
		意思決定 合意形成の場	自己存在感・自己有用感 の得られる場	共感的な関わり
①問題の発見・確認	特別の教科領域 」 など			
②話し合い活動				
③準備				
④集会活動				
⑤振り返り				

一番左が児童の活動の流れを表したものである。これらの活動の中で予想される児童の姿を思い描き、どのような活動にしていくことがやる気の向上につながっていくかを考え計画していく。まずは、学級活動とそれ以外の時間とをどのように関連付けていくことが有効かを考え計画を行った。例えば、集会活動に向けての準備で、粘り強く最後までやりきることができない児童いることが予想できるので、道徳科の学びを生かすことを考えた。次に、児童のやる気を維持し高めるための3つの視点を活動にどのように入れていくかを考えた。例えば、児童の活動の中のどの場面で児童の決定に委ねていくかや、それぞれの児童がどのような場面で活躍することができるかなどである。この計画シートも、必要に応じつけ足したり、内容を変えたりしていき、臨機応変に改良すればよいだろう。

(2) 児童の活動中

「学級わくわく大作戦」における児童の活動の中心は集会活動実践に向けた集団活動である。児童の活動中、教員は3つの視点を意識し関わることが児童のやる気を維持し高めるために大切だと考える。前述の表 2-3「計画シート」の児童の活動の流れに沿って、その内容とやる気を維持し高める工夫を述べていく。

①問題の発見・確認

児童が「学級わくわく大作戦」と出合う際には、「やってみたいな」「わくわくするな」と感じるものがその後のやる気につながると考える。学級活動(1)は、本来児童が問題を設定しそれを議題として話し合い活動等を行っていくものであるが、児童が今まで取り組んだことがなく、実態に応じた内容の集会活動をある程度具体的に提示することで、児童のやる気を引き出すことができると考え、教員側より提案していくこととする。今まで取り組んだことのないものに取り組むことで、児童の経験値が上がり「次はもっとこんなことがしてみたい」といった次への動機付けにもなると考えるためである。集会活動の内容を提示した後、児童が

見通しを持って活動できるようにするために具体的な活動の流れを示す。

次に、集会活動を成功させるために自分はどんなことをがんばっていけばよいか、個人のめあてを意思決定していく。それぞれが自分のめあての達成を目指すことが、集会活動の成功につながると感じることでやる気が高まると考える。そして、活動の終わりにワークシートを用いて自己評価し、それを教員が学級全体の達成度としてグラフに表わし可視化できるようにする。個々のがんばりが全体の達成度とつながることに気付くようにするためである。そこで、重要なのが、児童のやる気を向上させるための教員の共感的な声かけである。例えば、グラフを見て、全体の達成度が上がっていたら、「みんなの気持ちの一つになってきたのを感じるよ」や「一人一人のがんばりが結果につながっていて先生もうれしいよ」などである。下がっていても、マイナスに目を向けるのではなく、もっと上げていくためにはという視点で話をする方がよいと考える。また、チェックシートに教員からのコメントを入れたり、それを見て個々に声をかけたりして、児童のやる気を向上させていく。

②話し合い活動

話し合い活動では「自分たちで決めた」という意識を児童がもてるようにすることが、その後のやる気に直結すると考える。そこで、司会進行、書記等児童が役割を分担し、話し合いを進めていくことが大切である。児童の実態に応じては、司会進行シートを活用したり、話し合い活動の中で指導したりすることが必要になるだろう。また、決定していく際は、多数決のみに頼らない決定をしていくことが大切です。意見の対立を経て合意形成に至る過程で相手意識が育まれると考えるためです。児童による合意形成を目指すためにも、助言は必要最小限にし、最終的な決定は児童に委ねることが大切である。しかし、最終的な決定は児童の合意形成に委ねていくことが大切である。

③準備

話し合い活動の後、決まったことを基に、集会活動に向けた準備を行う。この活動は、児童同士の関わりが最も多く、集団づくりにおいてとても重要な時間である。それと同時に、やる気を保っていくのが難しい時間でもある。そこで児童の姿をある程度予測し、児童自身で声をかけあい準備を行えるように環境整備を行っていく。準備において活用できる時間や物、場所を提示することなどがそれにあたる。

④集会活動

集会活動が成功したと児童が感じるかどうかは、教員の共感的な声かけにかかっていると言っても言い過ぎではないだろう。活動中に、児童と同じように活動に参加し、心から一緒に楽しむ姿を見せるということも1つだろう。また、活動中や活動後に、児童のがんばりを自分事のように喜ぶ姿を見せることも1つだと考える。そのような教員の共感的な関わりが、児童の次の活動へのやる気につながるだろう。

⑤振り返り

「学級わくわく大作戦」全体を通した振り返りを行い、さらなる課題を見つけていくことで、次の活動につながっていくと考える。さらに、自分のがんばりを自己評価するだけではなく、友達にそのがんばりを認めてもらう場を設けることで、自分のがんばりを客観視することができ、自己有用感の高まりにもつながると考える。

(3) 児童の活動後

活動前に行った児童アンケートをもう一度行い、活動前後の変化を見取る。そして、その変化の要因を分析し、次の活動に生かしていけるようにする。また活動において見つかった課題を次の短期目標につなげていく。

(12) 前掲(8)p.181

(13) 前掲(3)p.24

(14) 坂本昇一「<やる気>の生徒指導」小学館 1985.9 p.8

第3章 実践について

第2章では、指導の流れを述べたが、第3章では実践の様子を詳しく述べていく。

第1節 児童の活動前

実践は、A校の5年生、B校の4年生を対象に行った。両校ともに第2章で述べた学級に関するアンケートを行い、学級の実態を把握した。

(1) A校について

A校についての実態と目標設定について述べる。次頁、図3-1は、A校の学級に関する児童アンケートの結果である。

5項目中「わたしは、クラスの人役に立っていると思う」の項目が低い。また「わたしは、学

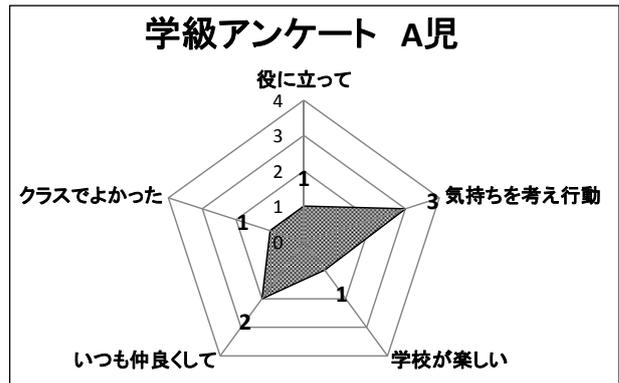


図3-1 学級アンケート A児

校に来るのが楽しいと思う」という項目においても同様に肯定的に捉えている児童が少ないと言える。

5項目の合計の最低値となっているA児の状況を図3-2に示す。

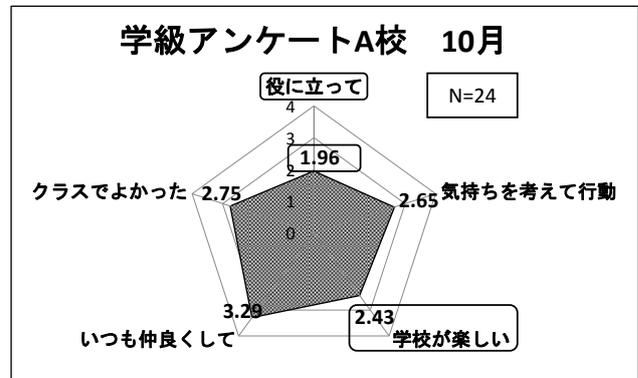


図3-2 学級アンケート A校

図3-2から分かるように、自己有用感の低さや学級への所属感の低さが目立つ。研究協力員の方からは、A児は友達とうまくコミュニケーションが取れずに、トラブルになることがあるとの報告があった。

図3-3は、平均値になっているF児童学級アンケートの結果である。

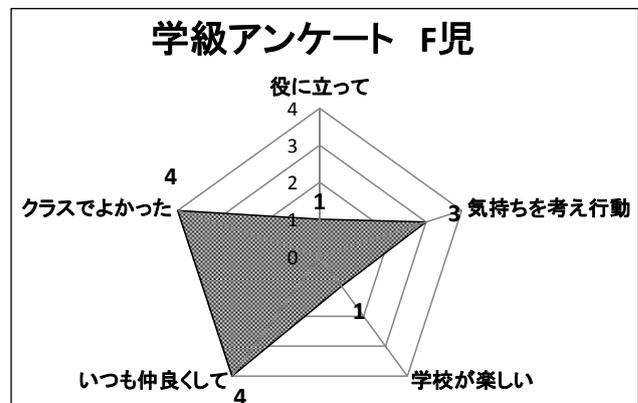


図3-3 学級アンケート F児

F児に関しては、友達との仲のよさは感じられ

るが、学校への楽しさや自己有用感の低さが目立った。聞き取りでは、F児は、学習活動に意欲をもって取り組むことや最後までやり抜くことがやや苦手だということである。

そこで、自己有用感を高める取組が実態を変えることにつながると考え、これらの結果や、普段の学級の見取りより「学級わくわく大作戦」に向けた目標を設定した。図3-4は、A校の「学級わくわく大作戦」に向けた目標設定シートである。

学級わくわく大作戦

10月23日 ～12月3日

目標 自分たちで決めたことを最後までやりとげよう
1人1人が活躍するフェスティバルにしよう

【児童の実態】

- 最後まで粘り強くやり抜くことが苦手
- 生活習慣が乱れている児童がいる
- 自尊感情が低い児童がいる

【主な活動内容】

- 児童のいろいろな側面が見られ、認め合うことができるオリムピック形式の出し物を行う

【活動のポイント】

- 話し合い活動をうまく進め自身につなげられるように、休み時間に計画委員のリハーサルの時間をとっていく。
- 当日の進行など、グループでの準備以外の役割を作って責任を果たせるようにする。

学校教育目標

いきいき学び、きらきら輝く
子どもの育成

—自分を律し、共に高め合い、
自他を大切にすること—

学年目標

Go ahead ～輝～

学級目標

Go three No.1 努力・協力・全力
～はばたけ未来～

図3-4 目標設定シート A校

自己有用感が低い児童や生活習慣の乱れが気になる児童をよりよい方向に向けるためにも、A校では学級目標具現化に向けて最後まで粘り強くやり抜く力をつけたいという担任の学級経営方針があった。そこで「学級わくわく大作戦」の目標を「自分たちで決めたことを最後までやりとげよう」と「一人一人が活躍できるフェスティバルにしよう」と二つにした。そして、具体的な集会活動は児童のいろいろな側面が見られ友達から認められるようなものとして、個性を生かせるオリムピックのようなものができたらよいと考え構想を立てた。また、生活習慣の乱れが目立つという実態について、児童の生活習慣に関するアンケートを実施した。アンケートの内容は、睡眠・朝食・排便とそれぞれに関するものとした。その結果、睡眠に関する事項に特に課題がみられた。

次頁、図3-5は、11時以降に寝ている児童と、それ以外の児童で学級アンケートの結果を比べたものである。

11時以降に寝ている児童の方がその他の児童よりほとんどの項目で低い結果が出た。中でも、自己有用感や学校への楽しさの項目が顕著であった。この結果より、睡眠状況を改善していくことが課題の改善につながると考え、学級活動(2)を用いて睡眠に関する学習を取り入れることとした。

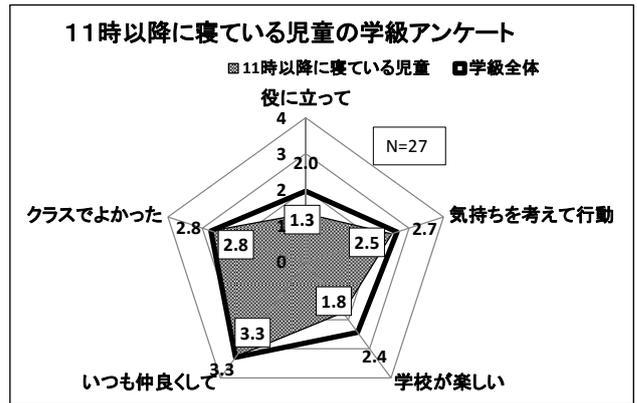


図3-5 11時以降に寝ている児童の学級アンケート
表3-1は、A校の「わくわく大作戦」の計画である。

表3-1 計画シート A校

児童の活動	関連付け可能な教科・領域	教員の関わり方の3つの視点		
		意思決定 合意形成の場	自己存在感・自己有用感の 得られる場	共感的な関わり
①問題の発見・確認	保健 「心の健康」	個人のめあて		ワークシートへのコメント
②話し合い活動	朝の会 「わたしはだれでしょう」	種目 担当グループ	計画委員等の役割	話し合い活動のコメント
③準備	特別の教科道徳 「相互理解・寛容」 「友情・信頼」 「希望と勇氣・努力と強い意志」	グループ内の役割	友達からの紹介(朝の会)いいとこみつけ(学級活動(2)) グループ内での役割	教員からの紹介文(朝の会)
④集会活動	学級活動(2) 「睡眠の大切さについて考えよう」	当日の進行 運営	お店の進行	一緒に遊ぶ
⑤振り返り			がんばったとこみつけ メダル授与式	活動全体のコメント

A校では特に自己有用感を高めていくことを重視して計画を行った。さらに、予想できるトラブルを回避するために道徳科の学習を関連付けたり、睡眠状況の改善のため保健や学級活動(2)の領域を活用したりして計画を行った。

(2) B校について

B校では、自己中心的な児童が在籍しており、相手の気持ちを考えて行動できないといった場面が散見されるということであった。図3-6は、B校の学級アンケートの結果である。

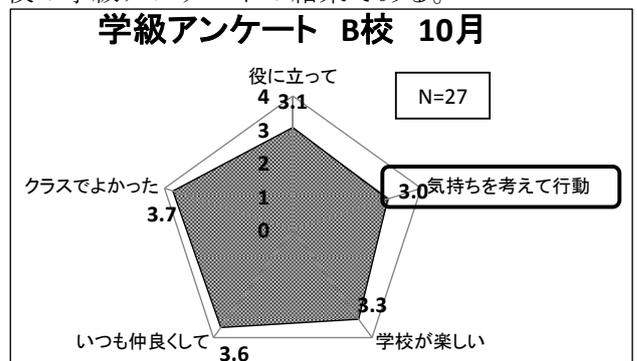


図3-6 学級アンケート B校
「わたしは、クラスの人といるとき相手の気持ちを考えて行動していると思う」の項目が他より低い結果となり、児童自身も課題と感じていることが分かった。またさらに、研究協力員への聞き

取りより、学習中の発言に偏りが見られたり、周りに流される児童がいたりする傾向にあることが課題であることが分かった。

図3-7は、学級や児童の実態から、学級経営方針を鑑みて設定したB校の「学級わくわく大作戦」の目標設定用紙である。

学級わくわく大作戦

11月14日 ~12月7日

目標 1人1人がかがやき、みんなで協力し
楽しむフェスティバルにしよう

【児童の実態】
 ・相手の気持ちを考えながら行動することが苦手な児童がいる
 ・自分の思いを積極的に伝える児童に頼ってしまいがち
 ・来年度から委員会活動が始まる

【主な活動内容】
 ・学年でお店を出して行うフェスティバル
 ・教職員の方を招待する

【活動のポイント】
 ・3学期に総合的な学習の時間で行う2分の1成人式に生かすことができるように招待状などを作って教職員を招待する。
 ・学級内のグループでも「〇〇リーダー」と役割を明確にし、責任感をもって活動できるようにする。

学校教育目標
 進んで学び、生き生きと
 たくましく、
 共に生きる子の育成

学年目標
 一致団結～協力・友情・挑戦～

学級目標
 思いやり・笑顔いっぱい・成長
 ～高め合い楽しく学ぶ～

図3-7 目標設定シート B校

B校は、4年生であることから、来年度の委員会活動に向けて、いろいろな集団の中で活動する機会をつくって自信をつけさせたいという学年の思いがあった。そのため、集会活動を学年で行い、教職員の方々を招待することにした。集会活動の内容については、身体を動かして行うものよりも、物をつくったり、室内でゲームをしたりすることが好きな児童が多い実態から、グループに分かれお店を出すことができるものとした。また、お店にすることで、相手がどうすれば喜んでくれるかという視点で考えて行動できると考えた。表3-2は、B校の「わくわく大作戦」の計画である。

表3-2 計画シート B校

児童の活動	関連付けが可能な教科・領域	教員の関わり方の3つの視点	
		意思決定 合意形成の場	自己存在感・自己有用感の得られる場
①問題の発見・確認	「話し合いの仕方について考えよう」	個人のみあて	ワークシートへのコメント
②話し合い活動	「わたしはだれでしょう」	計画委員等の役割 準備グループ	話し合い活動のコメント
③準備	「お話をよぶカード」 「特約の奉納道徳」 「友情・信頼」 「相互理解・寛容」	学級と学年の役割 友達からの紹介（朝の会） 役割を果たす	教員からの紹介文（朝の会） 教職員の方へカード渡し
④集会活動		当日の進行・運営	教職員の方との触れ合い
⑤振り返り		お店の進行 がんばったところ みつけ	活動全体のコメント

表3-2のように、自分で決め責任を果たす場として、学級での役割と学年での役割をつくり、いろいろな児童と話し合いながら責任を果たしていく機会とした。そうすることが、来年度の委員会活動に向けての自信となるだけでなく、自分の思いを伝えるだけではうまくいかない経験をし、相手の気持ちを考えながら行動できるようになると考えたためである。

第2節 児童の活動中

計画シート内の児童の活動の流れに沿って、実践の内容を述べていく。また、実践の中で研究協力員がどのように3つの視点を意識しながら取り組んでいたかも合わせて述べていく。

(1) 問題の発見・確認

児童が「学級わくわく大作戦」に出会う際は、児童の「わくわく」する気持ちを引き出すことがその後のやる気に直結すると考え、導入を工夫した。両校共に児童の実態を鑑み、教員側からある適度具体的に集会活動の内容を提示した。そして、活動のめあてや全体計画、話し合い活動の進め方などを伝え、児童がイメージできるようパワーポイントを用いた。図3-8は、その際に計画を示したものである。

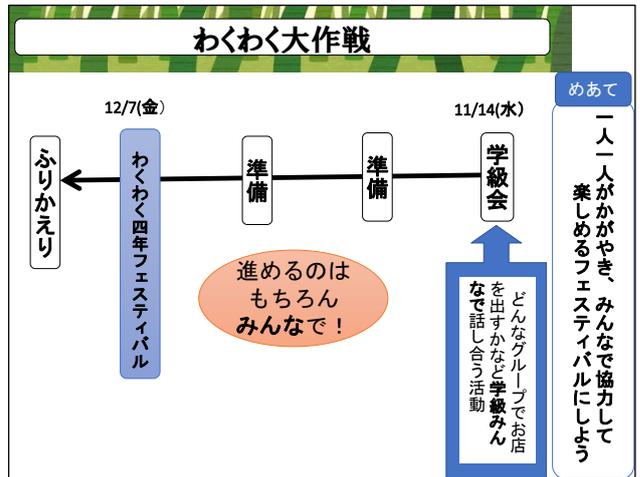


図3-8 学級わくわく大作戦の流れ（児童提示用）

それを見ながら児童は「そんなことできるの」「楽しみ」ととてもやる気に満ちた表情だった。その後、このフェスティバルを成功させるためにどんなことをがんばっていけばよいかを全員で話し合い、それを基に個人のみあてを設定した。

図3-9は、その際利用した個々のめあてを書き、活動日ごとに振り返ることができるチェックシートである。

下のチェックシートは、新たなシートを上重ねて貼っていくことができるようにし、自分の変化が分かるようにした。目標の内容によってはその時の活動にそぐわないものもあるので、その際はどちらかだけをチェックしていくこととした。自己評価の際には、特にがんばったことや次に向けてがんばることを書いていく。そうすることで、次の活動に向けてさらにめあてを意識することが

わくわく大作戦

名前

〇わくわくオーケストラフェスティバルに向けて自分のがんばることを2つ書いてみよう。

①積極的に話し合いに参加し意見を言う。

②自分のやることがおわったらほかの人の手伝う。

個人のめあてを書く

チェックシート
11月15日3 時間目

〇今日の活動の中で、自分のめあてはどれだけ達成できましたか。
がんばること①について

できなかった あまりできなかった だいたいできた できた

がんばること②について

できなかった あまりできなかった だいたいできた できた

特にがんばったことや次の活動に向けてがんばることなど
みんなのでい話が活動できるように話し合えた。

活動ごとにめあてを自己評価するチェックシート

図 3-9 個人のめあてチェックシート
できると考えたためである。

そして、個々の頑張りを集計し、学級全体のめあての達成度としてグラフに表わした。図 3-10 はそのグラフである。

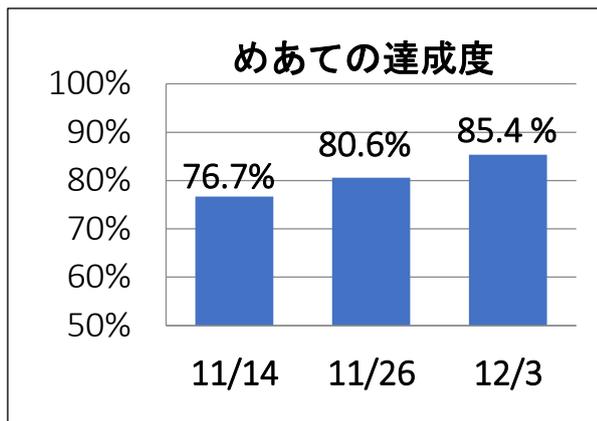


図 3-10 めあて達成度グラフ

これは、チェックシートの「できなかった」を 0 ポイント「できた」を 4 ポイントとし、その学級平均を児童に分かりやすいように 100%換算したものである。それにより、自分のがんばりが、学級のめあて達成度として反映されていることや、他の児童もがんばっていることを知ることができるようにした。これらのグラフは、児童が進んでめあての達成に向け、意識しながら活動していく原動力とするために、教室に掲示していき、変化が分かるようにした。そして、活動の前にこのグラフに立ち返り、自分の目標をもう一度確認して活動に入るようにした。前述したように、ここで大切なのが、教員による声のかけ方である。児童の意欲を駆り立てるよう工夫が必要である。下記のような声かけが研究協力員の方から何度か出てきた。

T:今回は、85.5%も達成できて先生はうれしいです。一人一人ががんばっているから、学級全体のがんばりにつながっているね。次はどうなりそう？

S:90%かな やっぱり 100%やね(口々に言う)

T:100%に近づくにはどうしたらよい？

この声かけでは、児童のがんばりを研究協力員の方が自分のことのように喜ばれることで児童の次のやる気を向上させたと言えるだろう。このような声かけを毎回の活動ごとに繰り返すことで、この結果を見るのが楽しみになり、そのために自分のめあてを意識しながら取り組む姿が見られた。また、振返りを繰り返す中で、自分のめあてがある程度達成できたら、さらにその範囲を広げて達成を目指す児童が出てきた。図 3-11 はその例である。

②積極的に行動する。

11月15日3 時間目

できなかった あまりできなかった だいたいできた できた

特にがんばったことや次の活動に向けてがんばることなど
次は自分の仕事をスムーズにできたらいいです。

11月26日2 時間目

できなかった あまりできなかった だいたいできた できた

特にがんばったことや次の活動に向けてがんばることなど
自分の仕事じゃなくても手伝う。(協力する)

図 3-11 振返りシート 児童記述

個人のめあては「積極的に行動する」と設定した。11月15日ではその範囲が「自分の役割を果たすこと」に留まっていたが、それが達成できると、次はその範囲を自分の仕事以外に広げ、グループの活動がスムーズに進むよう、他のメンバーを助ける姿が見られるようになった。これは、活動していく中で、「自分は自分たちである」という意識が高まったと考えられる。

前述のめあての達成度は下がることもあった。B校では、フェスティバル直前に達成度が下がってしまった。その際に研究協力員の方は、以下のように声をかけられた。

今回の達成度が下がったのはフェスティバルの直前にも関わらず準備が完璧に終わって

いない焦りからだね。でも、それは今日の準備の時間が予定より少し短くなってしまったから計画がくるってしまったこともあるね。ごめんね。でも、どのグループも今でもお店を開けるくらい十分準備はできているから、焦る必要はないよ。

もちろん、児童の見通しが甘く、うまく時間を使えなかったことも要因であるが、それを叱るというのではなく、不安な気持ちに共感し、準備の時間がやや短くなってしまったことについて謝罪をしているところが大切だろう。児童はこれを聞き、それ以降の休み時間をうまく利用しながら残りの準備を進んで行う姿が見られた。このように、児童の気持ちに寄り添い、人間的な触れ合いをすることで、児童のやる気を高めることができる。

また、学級の友達のよいところを目を向けることを続けていくことで、学級に親和的なつながりができ、活動のやる気につながっていくと考え、朝の会を使って「わたしはだれでしょう」という活動を行った。図 3-12 は、その際に使ったワークシートである。

わたしはだれでしょう	わたしはだれでしょう
名前	名前
① わたしは、 運動 が得意です。	① わたしの好きな教科は、 せん算 です。
② わたしは、 勉強 をがんばっています。	② わたしは、 ダンサーになるためにダンス をがんばっています。
③ わたしは、 のびのび太 に似ています。	③ わたしは、動物に <u>触</u> るとうごき <u>か</u> ります。
④ わたしは、 まじめでの人気な 性格です。	④ わたしは、 いつも、えかぞ な 性格です。
⑤ わたしは、 どんなことも好き です。	⑤ わたしは、 せいたいダンサー になります。
下は先生が書きます	下は先生が書きます
⑥ 先生から見てわたしは 普段は真面目で運動も勉強も頑張る子 です! いじ、笑は、面白いですが大村きて、 ジョーセンがかりしています。	⑥ 先生から見てわたしは ダンスが上手 です。 ノートを <u>い</u> ねい <u>き</u> いています。 道徳の時間、発表をよく聞いています!

図 3-12 わたしはだれでしょうワークシート

両校共に行ったが、児童の実態に応じ定型文をつくりかえて実践を行った。自分のことを自分で書き、それを日直が名前を伏せて読み、誰のことを言っているのかをあてていくクイズ形式で行った。「わたしは、〇〇です」のように、他の児童に知ってもらいたいことを自分自身で考える欄をつくった。さらに「先生から見て、わたしは〇〇です」という欄を設け、教員が児童のよいところを認めていく機会とした。友達に自分のことをよく知ってもらうことも自己存在感の高まりにつながると考えるが、教員によりよいところを認めてもらうことでそれはさらに高まると考える。また、自分

で書いたものを読んでもらうことで「わくわく」感が高まるが、教員の書いた文章を聞くことである「わくわく」感の向上につながると考えを行った。

活動の中で、日直が「得意なこと」を読み上げているのを聞いて「〇〇さんじゃないかな」「〇〇さんも得意やな」と口々にそのよさをもった人は誰かと推察する意見が出てきた。このように推察する様子は、とても温和な雰囲気です、よいところを認め合う学級集団へと高まった。また、児童の意外な一面を知り、それについて興味をもった他の児童から質問が出ることもあった。紹介してもらっている児童の表情はみんなうれしそうで、自分を知ってもらうことに喜びを感じているようだった。その様子に自然と拍手を送る児童の姿が見られた。また、教員からの文章は、紹介してもらった児童だけではなく、それ以外の児童にとっても楽しみになっているようで「なるほど」や「先生、それ分かる」と同意しながら聞いている様子があった。教員から児童へと共感的な人間関係が広がっていったと考える。

(2) 話し合い活動

話し合い活動では、意見の対立を経て児童の力で合意形成に至る過程が重要である。しかし、限られた時間の中でまとめ切ることも大切と考え、その支援となるよう道徳科の学びを生かすことにした。A校では、相互理解、寛容の内容項目の「すれちがい」(15)という教材を用いた。そして「自分と異なる意見や立場を受け入れて、尊重しようとする態度を養う」学びが話し合い活動に生きると考え取り入れた。

話し合い活動では、具体的なお店の内容や準備を進めるグループ決めを行った。両校共に、話し合い活動の経験が少ないことから、司会進行グループの打ち合わせ時間をたくさんとり、自信をもって進行できるようにした。また、進行の支援となるような話し合いの進め方シートを活用した。次頁、図 3-13 は、その際に使った話し合いシートである。

このようなものを用いることにより、話し合いの仕方を学ぶということに重点をおくのではなく、自分たちで決めていくということに重点をおきながら進行できると考えた。両校共に、実際の話し合い活動では、たくさんの意見をまとめていく糸口を見つけるのが難しく、司会進行に困惑する姿が見られた。そこで、児童の合意形成を促すために、教員がフェスティバルのめあてに返る声かけを行

話し合い活動 司会進行例	
進行順序	司会進行例
1 はじめの言葉	これから学級会を始めます。
2 議題の提案と提案理由の発表	今日の議題は _____ です。 提案理由を〇〇さんをお願いします。
3 話し合うことの確認	今日の話し合うこと①は、 _____ です。 話し合うこと②は、 _____ です。 話し合うこと③は、 _____ です。
4 先生の話	次は先生のお話です。
5 話し合い① ・出し合う	これから話し合うこと①の話し合いを始めます。 意見を言ってください。(意見がでつくまで) 他に意見はありますか。
	意見が出ない時…意見が出ないので、〇分間考える時間を取ります。近くの人と話し合ってもいいです。
	事前に意見を出し合っていれば「くらべ合う」からはじめる。
・くらべ合う	くらべ合う話し合いに入ります。 出ている意見の中で、どれがよいと思うかを書いてください。 (できる限りよいところを見つける視点で)
	あまり意見が出ていないところがあれば…〇〇についての意見はありませんか。 意見が集中してきたら…〇と〇と〇にしばって話を進めてもいいですか。 話がそれたら…今日の議題は〇〇です。議題にそった意見を出してください。
・まとめる(決める)	これからまとめる(決める)話し合いに入ります。 今()に賛成が多いのですが、〇〇に決めてもいいですか。 反対の人はいますか。 話し合いの結果 _____ に決まりました。
6 話し合い②③	(話し合い①と同様に行う) 多人数で決まらなくよう ①2つの意見をどちらも取り上げる(時間があれば)。 ②いくつかの意見を合わせて新しい考えにする。 ③1つの意見に少し付け足しをする。 例:みんなが頑張れるようにルールを工夫するなど ④いくつかの意見を短い時間に議論にする。
7 話し合いのまとめ	〇〇さんに話し合いで決まったことを書いてもらいます。 〇〇さんに今日の感想を書いてもらいます。 最後に先生のお話です。 これで、学級会を終わります。学級会ノートの振り返りを書いてください。

図 3-13 話し合い活動シート

い支援した。それにより、児童は複数の意見を1つにまとめたり、よりみんなにとってよいものを探ったりしながら最終的に合意形成に至ることができた。

話し合い活動を終えた後、ある児童が研究協力員の方に「先生、今日の学級会とても楽しかった」と伝えに来た。普段はそのようなことをわざわざ伝えに来ることのない児童であったが、みんなが活発に意見を出し合い、自分たちで決めていくことに楽しさを感じ伝えたくなると推測できる。また、その他の児童の振り返りには次のような記述があった。

- ・うまいかないこともあったけど、次はもっと意見を出したい
- ・全然決まらなくてどうなるかと思ったけど、みんな決めてうれしかった
- ・いろいろな意見が出てよかった
- ・決まったことなどをしっかりとがんばってやりたい

みんなの意見をまとめていくことの難しさに気付いたり、みんなの力で決められた喜びを感じたりする児童がいて、それらが次の活動のやる気につながっていた。

(3) 準備

集会活動に向けての準備は、授業時間だけではなく、休み時間などを児童が有効利用し行っていく。しかし、遊びに行きたい児童と準備を計画的に進めたい児童でトラブルが起きたり、教員が何も言わなければ全く進まないグループがあったりすることが予想できた。しかし、ここで教員が促すのではなく、児童が自分たちで決めて行うことが、活動のやる気につながると考えた。研究実践校においては、児童が自分で決めて活動をするための様々な工夫があったので紹介していく。

まずは、児童が見通しをもって活動することができるよう環境整備を行った例である。図 3-14 は、課題把握の際に利用した予定表を拡大し、教室掲示したものである。

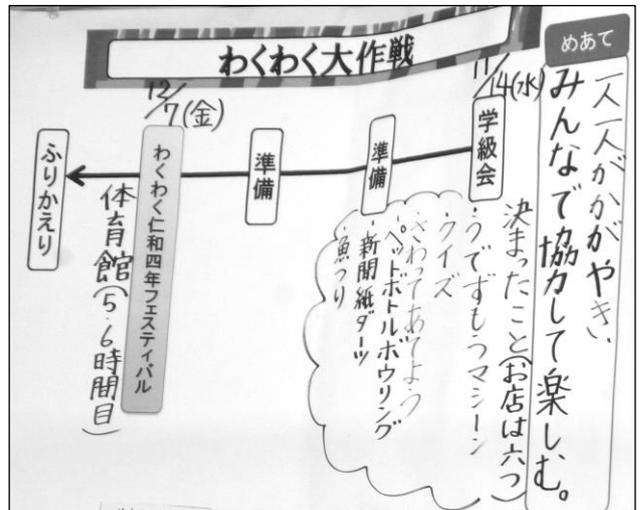


図 3-14 学級わくわく大作戦の流れ

予定の他に話し合いで決まったことなどを書き入れておき、見通しがもてるようにした。また、必要な道具を事前に聞いておいて準備をするなど工夫をした。さらには、児童が使いたいときに使いたい道具を使うことができるように、あらかじめ準備しておく工夫もあった。

その他の例として、次頁、図 3-15 は、児童の登校前に研究協力員の方が、児童のやる気を育むために黒板に書いたメッセージである。

実際にこのメッセージを書いた日の朝休みはほとんどの児童が一生懸命準備を進めていた。このように、直接準備することを促す内容にするのではなく、がんばっているグループを認める内容にしたことで、児童のやる気を育むことができた。

また、直接言葉にするのではなく、メッセージとして書くことで、言われたからやるというのではなく、自分で決めて準備を行っているという意識が児童に生まれ、それがやる気につながった。

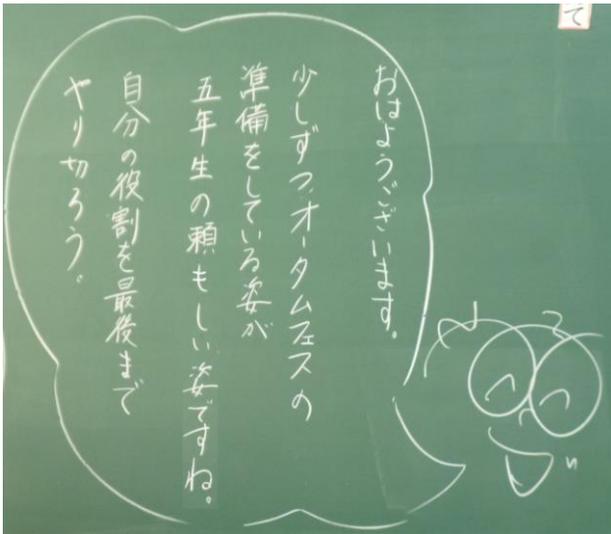


図 3-15 児童へのメッセージ

また、準備を行う場所についても児童が自分で決めて行えるような工夫があった。図 3-16 は、その時の様子である。

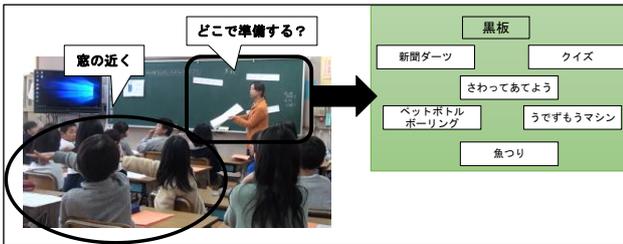


図 3-16 準備場所決定の様子

グループごとに準備しやすい場所を選んでいき黒板に表わしていた。もちろん、準備を始めて自由に動く方法もあるが、みんなで決めていくことで安全性も確保できるだろう。また、決まった場所を視覚的に表す工夫がされたことで、その後の移動時間の短縮にもつながった。

児童の役割についても、自分で決めて担っていくことがやる気の向上につながると考える。一方でいろいろな児童に活躍の場があることも個々の自己有用感の高まりにつながると考える。役割を決める際、全て児童の意思決定に委ねていくと積極的に取り組む児童に役割が偏ってしまうことはよくあることである。集会活動当日の司会進行やタイムキーパーなどの役割を決める際も同じような傾向が見られたので、研究協力員の方が児童の意欲を喚起するような声かけをされた。以下は、研究協力員と児童のやりとりである。

T: タイムキーパーは誰がしますか。
S1: (手を挙げる)
T: S1 さんをお願いしますか。S1 さんは、議長もがんばってくれていたから、他の人も

たくさん活躍してほしいな。

S2: (小さく手を挙げる)

T: あっ S2 さん。いいですね。

S2 さん、お願いします!

その時の S2 の様子を観察していると、仕事の内容を聞き、少しやる気になっているようだったが、手を挙げるのに躊躇していたところ、S1 が立候補したので、あきらめたようだった。しかし、研究協力員の方の声かけによりやってみようと思いが湧いたと考えられる。これは、研究協力員が普段より児童理解をしっかりと行われていたために、些細な変化に即座に気づく洞察力となり、それが S2 の活躍の場を広げることにつながったと考えられる。実際、集会活動では、S2 はやる気をもって自分の役割を果たそうとする姿が見られ、その後の感想にも自分の役割をしっかりと果たせたことへの喜びを表す記述があった。

(4) 集会活動

集会活動の実践の際は、教員と一緒に活動を楽しむ姿を見せたり、一人一人に共感的な声をかけたりすることが活動をより充実感のあるものにするだろう。この活動では、実践の中で見られた研究協力員の方やその他の教職員の方々の共感的な関わりについて報告していく。

前述のように、A 校では児童のいろいろな側面が見られ、お互いに認め合うことのできるようなオリンピック形式のお店をグループで出すこととなった。また、活動の後にはメダル授与式を行うことを話し合いで決定した。図 3-17 は、集会活動の際の児童の様子である。



図 3-17 集会活動実践風景

新記録が出ると声をあげて喜ぶ児童や、お互いの活躍をたたえ合う姿が見られ、児童の認め合いの場となった。また、種目に参加した児童と教員の中で次のようなやりとりがあった。

S: やった! 2 位や。先生!! (先生を呼ぶ)
T: (急いで S に近づいて) どうしたの。
S: 先生、ぼく 2 位やった!

T:それはすごいなあ。先生もうれしいわ。
(2人でハイタッチ)

このように研究協力員の方が児童の活躍を自分事のように喜ぶ姿を見せられたことで、児童の自己存在感が高まり、やる気につながった。また、それを聞いた他の児童も集まってきて、その児童を認める発言をたくさんしていた。

また、メダル授与式では、児童の予想外の活躍に他の児童からの拍手が起きるといったこともあった。その児童も、みんなから拍手を受けながらメダルを授与され、とてもうれしそうな姿が見られた。さらに、研究協力員の方と児童の中で以下のようなやりとりもあった。

S1:第3位、S2さん。
S2:(メダルをもらいに行く)
T:S2さん。メダル2枚目じゃない。すごいね
(思っきり拍手する)
S3:ほんとうや。2枚目や。(拍手する)
S4:S2さん、すごいな。(拍手する)
S5:メダル大量や。
S2:(うれしそうにメダルをもらう)

教員がS2の活躍に気付き、認める発言を行ったことで、児童もその共感的な関わりを感じ取り、共感が広がっていった。そして、それがS2の自己存在感の高まりにもつながり、互いの親和性の高まりにもつながったと考えられる。

次に、学校全体として教職員の方々が共感的に関わる機会となったB校の集会活動について述べていく。前述のようにB校では、学年全体でお店を出すフェスティバルという形式の集会活動を行った。児童のわくわく感を高めるために学校の教職員に招待状を作り招待した。招待状を児童が作り渡すことで、学校の教職員に活動を知ってもらい機会となった。また、「楽しみにしてるわ。招待ありがとう」という言葉をかけてもらうことで、児童の「わくわく」感が高まり、準備へのやる気につながった。また、当日も職員室の黒板にフェスティバルが行われることを書かれていたので、教職員から事前に声かけをもらったり、フェスティバルにたくさん参加してもらったりする機会となり、児童のさらなるやる気につながった。

次頁、図3-18は、集会活動当日の様子である。

このようにいろいろな教職員が一生懸命活動に取り組み、心から楽しむ様子を見せて下さったことで児童のやる気につながった。



図3-18 集会活動での教職員との触れ合いの様子

以下は、豆つかみのお店での参加された教職員と児童のやりとりである。

T:(豆つかみを終えて)この結果は?
S1:暫定2位です
T:え?2位?もっとすごい人いるの?
S1:はい。Aさんとか、あっBさんも。
T:ほんまや。すごいな。
S2:おしかったですね。

「お店工夫しているね」など直接言葉にしているのも児童のやる気の向上につながるが、教員の方が心から悔しがる姿を見せたことで、自分たちのお店が先生を本気にさせていると感じ、さらなる喜びにつながっていた。そして、その姿を見て、他の児童がそのお店にどんどんやってきて、児童同士の共感につながっていた。

(5) 振り返り

集会活動後の振り返りでは、児童が自己有用感を感じられるように「がんばったところ見つけ」を行った。図3-19は、その際に用いたワークシートである。



図3-19 がんばったところ見つけワークシート

まずは、自分で自分のがんばりを振り返って左上に書き、その後同じ準備グループの児童同士で、がんばっていたことを書いて交換し合い、それを読んで気付いた自分のがんばりを書いた。以下は「友達からカードをもらって気付いた自分のがんばり」欄における児童の記述である。

- ・自分がみんなを引っ張っていたことに気付いた。
- ・素早く行動していたつもりはなかったけど、そう言ってもらえてうれしかった。
- ・自分って意外とやさしいなと思った。

カードをもらって、自分では気付かなかった自分のがんばりに気付く児童が多数いて、自己有用感の高まりにつながったと考えられる。また、友達のカートを記入する際は「たくさんありすぎて書けない」と言っていた児童がいた。これは、集会活動前に研究協力員の方が「今日の活動では、ぜひ友達のよいところをたくさん見つけておいて下さい」と伝えておいたためであると考えられる。そのため、友達のよいところを見ることにつながり、それが親和的な雰囲気での集会活動にすることにつながったと考える。

また、活動全体を通しての振り返りでは、「次はもっと工夫していきたい」や「またみんなでフェスティバルを開いてみたい」など次の活動へのやる気につながる発言がたくさん出ていた。これは、今まであまり児童が経験したことのない内容の活動を教員側から提案したことにより、新たなアイデアが生まれたりや次の活動のやる気にもつながったためと考えられる。

(5) わくわく睡眠大作戦

第3章のA校の実態把握で述べたように、睡眠状況を改善していくことが課題の改善につながると考えたので「学級わくわく大作戦」の一環として、学級活動(2)の時間を活用し「わくわく睡眠大作戦」という活動を行った。また、その活動に保健の「心の健康」の学びを生かすことができると考え、関連付けた取組を行った。「心の健康」の単元目標の中の以下に示す二つは「学級わくわく大作戦」との関連性が大きいと考えた。

- ・心と体は相互に影響し合うことを理解できるようにする。
- ・不安や悩みへの対処には、大人や友達に相談する、仲間と遊ぶ、運動をするなどいろいろ

な方法があることを理解できるようにする。

(16)

「学級わくわく大作戦」では、「わくわくするな」や「楽しいな」という気持ちから、学習に意欲がわいてきたり、友達に優しくなれたりして学級がよりよい集団になっていくことをねらっていると述べた。そこで、保健の心と体は相互に影響しあっているという学びを生かし、わくわくする気持ちが体を健康に保つことにつながると同時に、生活習慣が乱れてしまい健康な状態が保てないと、わくわくする気持ちもおきにくくなるということに気付かせるようにした。自分で自分の生活習慣を整えていくことも「学級わくわく大作戦」の一環であることを児童に伝え、学級活動(2)「睡眠の大切さを考えよう」という単元に取り組んだ。この単元では、事前に児童にとって睡眠に関するアンケートの結果と全国の5年生の結果を比べ、学級や自分自身の課題に気付くきっかけとした。そして、その課題を解決するためにどのようなことができるか話し合った。その話し合いを基に個々が自分のめあてを意思決定し、一週間取り組んだ。図3-20は、その際に使用したワークシートである。

わくわくすいみん大作戦

名前

○気持ちよく目覚めて、わくわくする1日をむかえるために自分のがんばることを考えよう。

ご飯を食べる前に宿題を終わらせる。

チェックシート *数回自動的に宿題をすませておくと、早く終われずね、がんばりました。*

日	どちらかに○をつけよう	ねおきの様子 (顔に色をぬろう)				
	できた	できなかった	すっきり	ふつう	ねむい	イライラ
11/20 (火)	できた	できなかった	😊	😐	😴	😡
11/25 (日)	できた	できなかった	😊	😐	😴	😡
11/26 (月)	できた	できなかった	😊	😐	😴	😡
11/27 (火)	できた	できなかった	😊	😐	😴	😡
11/28 (水)	できた	できなかった	😊	😐	😴	😡
11/29 (木)	できた	できなかった	😊	😐	😴	😡
11/30 (金)	できた	できなかった	😊	😐	😴	😡

1週間チャレンジした感想を書こう

できなかった日もあったけど、ふだんより早く寝ることができたので宿題を早く終わらせるようにしたいです。

図3-20 わくわくすいみん大作戦ワークシート

図 3-8 のように、めあてを書いて振り返ることができるようにした。めあて作成時は、児童が1週間やる気をもって活動に取り組むことができるよう一人一人にコメントを書いていた。心と体のつながりを実感するためにワークシートでは、寝起きの様子をチェックできる欄を設けた。結果、児童のチェック欄を見ていると必ずしもめあて達成が寝起きの様子につながっていない児童がいた。しかし、1週間チャレンジした後の感想から、生活改善につながった児童が多くいることが分かった。以下はその例である。

- ・宿題を先にしておくと後でゆとりが出て早く寝ることができた。
- ・ゲームの時間を減らして早く寝ると、朝前より起きやすくなった。

他にも、自分で決めたことを実践することが、生活改善につながっていたと気付く記述がたくさんあった。

また、保健を関連付けたことで、授業中の児童の発言から、保健で学んだことを生かす発言が出てきていた。さらに、同期間に同じような学びがあることで、児童が生活習慣の見直しに向きあおうとしていたと感じた。

保健の「心の健康」の単元の学習の際には、3つの視点の1つである「自己存在感を感じられる場を設定する」視点を取り入れた。第2時では、「心と体のつながり」についての学習を行う。その中で、心の健康を保つ方法の一つとして、自分のよさに気付くということが教科書でも取り上げられている。そこで行ったのが、「いいとこ大発見」である。図 3-21 はその際に使ったカードの一部である。

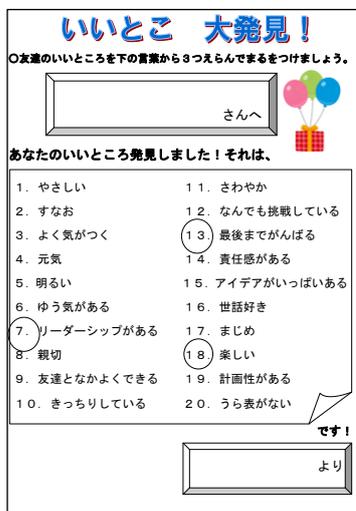


図 3-21 いいとこ大発見シート

図 3-10 のように、短時間で行えるようにいくつかの項目の中から、グループの友達のよいところにあてはまるものを3つ選んで渡すという方法をとった。ここでは、教員が共感的に関わっていくことも児童の自己存在感の高まりにつながると考え、事前に研究協力員の方にも児童の全員分のよいところを選び、カードに書いて渡してもらった。学習の様子を観察していると、どの児童も意欲的に取り組み、もらったカードを見て喜んだり「ありがとう」と言ったりする様子が見られた。また、友達からカードをもらい自分のよさに気付く児童もいた。

第3節 児童の活動後

活動後には、活動前の見取りで行った学級に関するアンケートを行った。

(1) A校について

A校では、事前の学級アンケートでは「わたしは、クラスの人役に立っていると思う」「わたしは、学校に来るのが楽しいと思う」に肯定的な意見を選んだ児童が半分を割っていた。図 3-22 は、事前(10月)と事後(12月)の結果をまとめたものである。

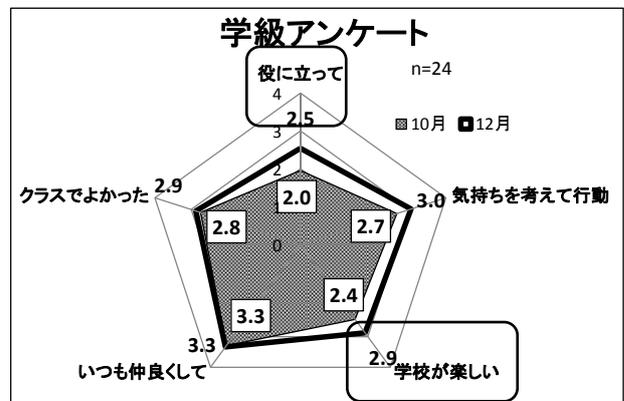


図 3-22 学級アンケート A校

ほとんどすべての項目に上昇が見られた。特に、10月に否定的な回答をした児童が多かった上記の二項目については、0.5ポイントの上昇が見られた。半数以上の児童が肯定的な答えを選択したことになる。「自分は学級の役に立っているか」という項目の上昇が顕著だったのは、集会活動実践に向け自分の役割をしっかりと果たしたことがみんなを楽しませることにつながったと思えたことからだと考える。また、振り返りの際の「がんばったとこ見つけ」で友達からがんばったことを認めてもらう経験をしたこともこれにつながったと考える。また、「学校が楽しい」という項目の上昇は、「学

級わくわく大作戦」が充実した活動となり、その楽しさが学校へ来ることの楽しさにつながったと考える。

では、活動前で取り上げたA児とF児にはどのような変化が見られたらだろうか。図3-23はA児の学級アンケートの結果である。

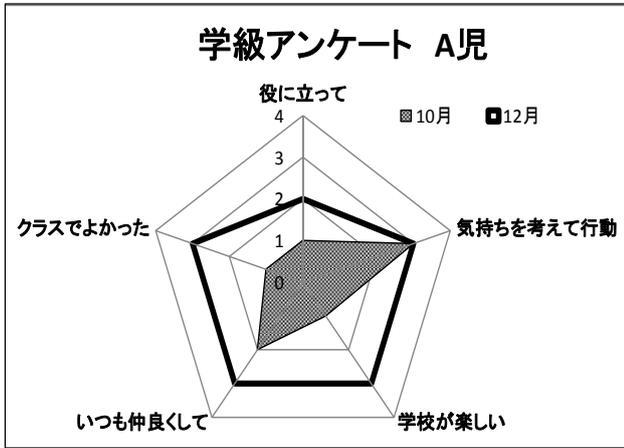


図3-23 学級アンケートA児

図3-23から、A児は全項目が上昇もしくは同じであった。中でも、「学校が楽しい」や「このクラスでよかった」という項目は2ポイント上がり、肯定的な意見となった。A児は、自分のアイデアを生かしながらお店の準備をしていた。準備の際は、友達とのトラブルもあったが、研究協力員の方が児童のそれぞれの思いを共感的に聞き、解決していかれたことで集会活動当日はとてもよい笑顔で取り組む姿が見られた。それが「楽しい」「このクラスでよかった」といった結果につながっていると考えられる。「クラスの役に立っている」という項目の上昇は見られたものの、やや否定的な意見であったが、集会活動後の感想は「自分の役割を果たせた。笑顔になっている人がいた」と書いていたことから、自分の役割を果たしたことで友達が喜んでくれたと考えられるようにはなっていないだろうか。

次頁、図3-24はF児の学級アンケートの結果を表したものである。

図3-24のF児についても「学校が楽しい」という項目に関して、3ポイント上昇が見られた。「このクラスでよかった」という項目は1ポイント下がったが、肯定的な意見であったので、それほど差異はないことが考えられる。F児は、集会活動当日の司会にチャレンジするなど終始やる気をもって活動に取り組むことができていた。また、集会活動当日では、研究協力員の方がF児の活躍と一緒に喜ばれたことで、児童の表情がますます明

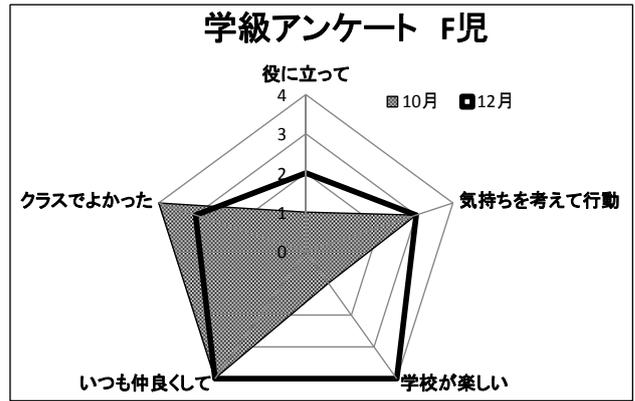


図3-24 学級アンケートF児

るくなっていった。そして、それが「楽しかった。ありがとう」と、お客としてお店を回る際の友達への共感的な声かけにつながったと考えられる。最後の感想では、「司会ができた。みんながわくわくしていたからよかった」と書いていた。感想からは、司会をやりとげたことで自信につながったのではないかと考えられる。

(2) B校について

B校では、自己中心的な考えの児童がいて、相手の気持ちを考えて行動することに課題があるという実態を研究協力員の方が述べられた。事前の調査においても「相手の気持ちを考えて行動する」の項目が他の項目より落ち込んでいた。

図3-25は、B校の学級アンケートの結果である。

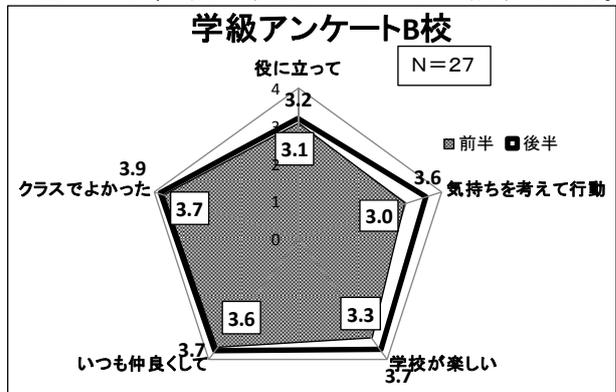


図3-25 学級アンケートB校

「相手の気持ちを考えて行動している」という項目が一番上昇している。それは、話し合い活動の経験が深く関係しているのではなかろうか。B校では、話し合い活動時に意見の対立があり、まとめていくのに苦労した経験があった。しかし、それぞれの思いを伝え合い、最終的に合意形成に至ることができた。話し合い活動後の振り返りでも「時間はかかってどうなるかと思ったけど決まったよかった」「いろいろな意見が出てよかった」「嫌なことあったけど決まってよかった」などの記述が

活動が進むにつれて徐々に達成できたと答える児童が増えていたことが分かる。児童の自己評価であるので、個々のめあてが本当に達成できているのか見取るのは難しいが、少なくとも児童は徐々にめあてに対する意識が高まったと言えるだろう。これらは、児童が意識しながら取り組むことができるよう研究協力員が促されたことやがんばりに共感する関わりを行われたためである。また、児童の感想を見ると、内容にも変化が見られるようになった。

表 4-1 は、1 人の児童の振返りの変化である。

表 4-1 振返り記述欄

めあて	①人の意見をしっかりと聞く ②自分だけがするのではなく、みんなで協力する
1回目	人の意見をしっかりと聞くことができたから、次はみんなで協力することをがんばります。
2回目	話し合いで協力することができた。
3回目	みんなで意見をぶつけあうことができた。

1 回目の活動では、めあて①の「人の意見をしっかりと聞く」の達成に向けて重点的に取り組み、2 回目と 3 回目は、めあて②の「みんなで協力する」の達成を目指していることが分かる。感想に着目すると 1, 2 回目は、やや抽象的な内容になっているが、3 回目では「協力する」ということを「みんなで意見をぶつけ合う」と具体的な行動に捉え直し、目指していたことが分かる。これは、活動が進むにつれて、児童のめあてへの意識の向上がしたからだと考えられる。

また「わたしは、『学級わくわく大作戦』の目標が達成できたと思う」という項目では、9 割を超える児童が肯定的な回答を行った。目標の一つである「自分で決めたことを最後までやりとげよう」は、自分の役割や準備について自分たちで決めたことだから最後までがんばろうという意識を持って取り組んでいたという面から、達成できていたと言えるだろう。研究協力員の方は、途中で準備が滞っているグループもあったが、他のグループのがんばりに触発されて、徐々に声を掛け合い動くようなる姿や、普段の休み時間はすぐに遊びに出ていく児童も、進んで声をかけ協力して準備をする姿が見られたと述べられていた。フェスティバル後の後片付けにおいても、最後まできちんと動く姿が見られた。さらに「一人一人が活躍するフェスティバルにしよう」という目標については、一人ずつお店を準備する役割があり、かつ

集会活動の内容をオリンピックにしたことで、児童の活躍の機会が増えていたため児童の肯定的な回答が増えたと考えられる。また、いろいろな児童が活躍できるよう研究協力員の方が促されたため、その機会はますます増した。

A 校の学級目標は「Go three No. 1 (努力・協力・全力)～はばたけ未来へ」であるが、「学級わくわく大作戦」の活動を通し「努力・協力・全力」のどの姿も見られたと言えるので、この取組で学級目標実現に近づいたのではないかと考える。

(2) B 校について

B 校において「わたしは、フェスティバルが成功したと思う」という設問に対し、70%の児童が「あてはまる」と答え、30%の児童が「どちらか」というとあてはまる」と全員が肯定的な回答であった。図 4-3 は、その理由の中の頻出度の高い語を表わしたものである。

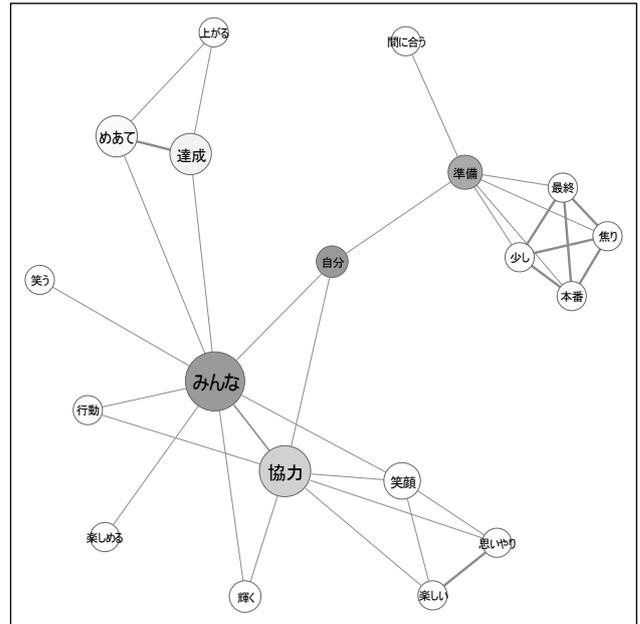


図 4-3 学級の目標が達成できたか B 校

B 校においても「みんな」が高頻出であり、他者を意識することができていたことが分かる。B 校の「学級わくわく大作戦」の目標である「一人一人がかがやき、みんなで協力して楽しむ」の「協力」が高頻度であり「かがやく」「楽しむ」も出てきたことから、児童は目標を意識して取り組んでいたことも分かる。また、図の左側には「めあて」「達成」という語の頻出度が高く、自分のめあてを達成することが成功につながったと感じていることが見取れる。実際に「わたしは、自分のめあてを達成できるように取り組んだ」かの問いに対する B 校の回答では、95%以上の児童が肯定的な

回答を選んだ。研究協力員の方は活動の始めには必ず、自分のめあてを確かめる時間をとられていたこともあり、実際に児童の振返りの記述にも、自分のめあてに関する内容が多くあった。

図4-4は、活動のそれぞれの時間で自分のめあてをどれだけ達成することができたのかを表したものである。

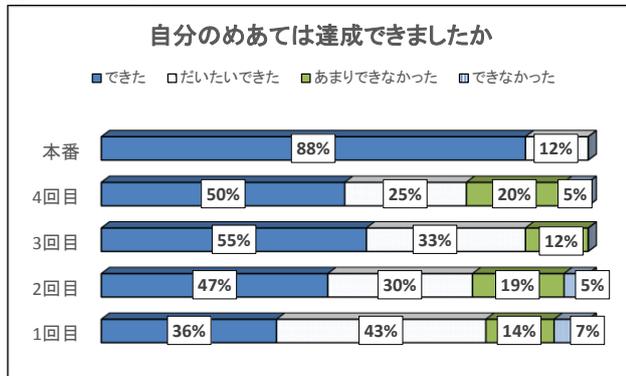


図4-4 活動ごとのめあてに対する自己評価 B校

第3章で述べたように、本番直前でやや達成度が下がったが、全体的には徐々に上がり、本番では全員が肯定的な項目を選んでいることが分かる。ここから、児童が自分のめあてに向かう気持ちがどんどんと向上していたことが分かる。これらが、次の活動の原動力となったと考える。

また「学級わくわく大作戦」のめあてである「一人一人がかがやき、みんなで協力して楽しむフェスティバルにしよう」が達成できたかでは、全員が肯定的な回答であった。実際「一人一人がかがやき」に関しては、学級の役割と学年の役割の両方を担ったことで、活躍の場が広がったことや、さらにはその活躍の姿をたくさんの教職員の方に共感してもらえたことでとてもよい表情で活動することができていた。また「みんなで協力し」に関しては、話し合い活動でみんなで意見を出し合いながら合意形成に至ったこと、声を掛け合い休み時間を利用して一生懸命準備をしていたこと、お客さんが楽しんでくれるようにグループでいろいろな工夫をしたことなど様々な場面での協力が見られた。「楽しむ」に関しては、フェスティバルは成功したと全員が答えていたということからも児童が楽しかったと感じていることが見取れた。これらのことから、目標の達成はできていたのではないかと考える。B校の学級目標である「思いやり・笑顔いっぱい・成長～高め合い楽しく学ぶ」にもつながっていると考えられる。さらに、B校での取組は学年での取組であったため、学年目標の「一致団結～協力・友情・挑戦」を意識してい

た。「学級わくわく大作戦」はこれらを目指すための1つのアプローチであったが、実践での児童の様子や意識から、これらの実現に少し近づけたのではないかと考える。

本研究では、児童が未来を力強く生き抜くために「主体性」や「社会性」を育むことを目指してきた。実践では、両校とも児童は自分のよさを生かし合いながら、協力して活動する姿が見られた。特に話し合い活動では、自分の思いを伝えなければ話し合いが成立しないことやそれと同時に、自分の思いを通すだけではうまくいかない経験をする中で「自分は自分である」意識と「自分は自分たちである」意識を両方大切にしながら活動ができていたと感じる。このような経験をする過程で、児童の「主体性」や「社会性」が育まれていくと考える。

第2節 「学級わくわく大作戦」を通して

(1) 学級活動を中心とした学級集団づくり

本研究では、児童の「わくわく感」を醸成するものとして学級活動(1)集会活動を取り入れた。集会活動の内容が児童にとって取り組みたいものになっていたため、児童はやる気をもって活動に取り組むことができていた。そしてその「やる気」が児童による自治的な活動へと結びついたと考える。両校共に話し合い活動においては、意見の対立を経て合意形成に至ることができた。そして決めたことを実践するために、時間をうまく使いながら児童同士で声を掛け合い準備する姿が見られた。また、実践においても「みんな」が楽しむことができるよう工夫し、取り組むことができていた。もちろん、すべての活動がスムーズに進んだわけではなかったが、振り返りでは「けんかもあったけれどみんなで意見を言い合えたのがよいと思った」と書いている児童がいた。児童同士の関わりが多い活動であるからこそトラブルがつきものである。実際にA校では、集会活動直前に、同じお店グループ内で児童同士の言い争いがあった。しかし、実際の集会活動では、どちらの児童も楽しそうに一生懸命取り組むことができ、その後の振り返りではお互いのよいところを書いて渡し合うといった姿が見られた。より楽しいもの、よりみんなに喜んでもらえるようにと思えば思うからこそ起きた言い争いである。このようなトラブルこそが児童の人間関係形成の能力を磨くものであると考える。児童同士の関わり合いの機会が多いにある学級活動(1)は、集団づくりに有効な時

間であったと考える。

さらに、学級活動とその他の学習を関連付けたことが効果的であったかどうかであるが、学級活動や関連付けた教科・領域で児童の学びに深まりがあったと考えられる。前述のように保健の学習と学級活動(2)を関連付けることで、児童はより生活習慣改善を意識することができた。また、道徳科の学びが学級活動(1)に生きたり、学級活動(1)の経験が児童の共通の経験として道徳科の学習の中で生かされたりした。

「学級わくわく大作戦」は、短期間の取組として行っていたが、学級目標実現に向け、学級活動とその他の教科等をより効果的に関連付け、1年間見通した集団づくりの計画を立てて行うことで、より効果が上がると考える。特に道徳科や総合的な学習の時間は集団づくりに関わる部分が大きいため、これらをうまく活用していくことが有効だと考える。

(2) 3つの視点を取り入れることを通して

本研究では、児童のやる気を維持し、高めるために3つの視点を取り入れた。実際に取り入れたことで、児童のやる気につながる場面がたくさんあった。さらに、一つ一つの視点から新たな成果も出てきたのでそれぞれの視点ごとに述べていく。

・意思決定、合意形成の場をつくる

児童が自分ないし自分たちで決める自由があることが児童のやる気につながったと感じた。そのような場を増やすことでより自治的な活動となり、それが児童同士のつながりを強めることになったと考える。しかし、同時に児童が自由に決定できる場を多く取ろうとすればするほど、教員のより細やかな関わりが必要となると感じた。そこで、普段より児童の様子を書きとめていたり、学級アンケートのような客観的な見取りを定期的に行ったりしながら児童理解をしていくことが大切であると感じた。また、合意形成の場は、自分もよくて相手もよい方法を探ることが求められる場であり、相手意識の向上につながったと考える。さらに、決めたことを最後まで責任をもってやり遂げることにもつながったと考える。

・自己有用感・自己存在感を得られる場をつくる

このような場を意識して取り入れたことで、児童の自己有用感や自己存在感の高まりが見られた。第3章の各校の学級に対するアンケートの結果からも見取れる。これらが児童の自信となり、ますます活動のやる気につながったと感じた。

・共感的な関わりをする

教員が共感的に関わっていくことで、児童のやる気につながったことはもちろんであるが、教員の姿を見て、児童同士にも共感的な人間関係が育まれ、親和性高まる学級集団となったと感じた。集会活動で、教員が心から楽しむ姿や本気で悔しがる姿から共感的な関わりを児童が感じ取り、それが児童同士へと広がっていったためと考えられる。また、共感的な人間関係が構築されたことにより、学級に親和的な雰囲気醸成されたと感じた。

教育活動の中でこれらの視点を意識せずに取り入れることができている教員は多いと考える。しかし、意識しながら活動に取り組むことで、個々の教育活動が集団づくりとしても意味を持つものとなり、つながりが出てくると感じた。これらの視点は学級集団づくりにおいて有効な視点だったと考える。

おわりに

本実践の様々な場面で子どもたちが「わくわく」しながら活動を行っていた様子が見られた。その姿はまさにやる気に満ちあふれていると感じた。しかし、筆者がこの実践を突然これらの学級で行ったとしても、きっとうまくはいかなかったと考える。では、実践の中でなぜこのように児童の「わくわく」する姿をたくさん見つけることができたのだろうか。それは研究協力員の方々学級の実態を正確に把握し、それぞれの子どもをしっかりと理解しておられたからだろう。「学級わくわく大作戦」の根幹は教員の児童理解である。一人一人の子どもたちの様子をしっかりと理解することが、素敵な子どもたちの笑顔があふれる学級に、互いの親和性が高まった学級経営へとつなげることができるのではと考える。

児童が満面の笑みを浮かべて、一生懸命活動に取り組む姿を見て、わくわくしていたのは研究協力員の方々でもあった。「学級わくわく大作戦」は、児童だけではなく教員のわくわく感を醸成するものであると感じた。

最後に、本研究の趣旨を理解し、協力して下さった京都市立勸修小学校と京都市立仁和小学校の校長先生をはじめ、自らの学級での姿を調査対象として協力して下さった研究協力員の先生方、いつも温かく迎えて下さった両小学校の教職員の皆様に心から感謝の意を表したい。